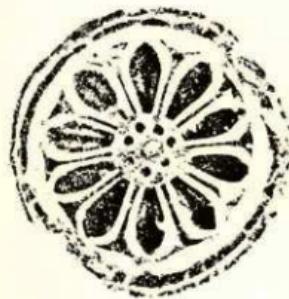


国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和57年度)3

新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・ 針江北遺跡発掘調査概要

—高島郡新旭町所在—



1983

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

はしがき

昭和57年度より、新旭町の平野部を縦断する国道161号線バイパス建設に伴う発掘調査を本格的に開始した。今年度は、南より順に新庄城遺跡、正伝寺南遺跡、針江中遺跡、針江北遺跡の4遺跡を対象に調査し、弥生時代から戦国時代にわたるさまざまな遺構や遺物が出土した。これら遺構や遺物については、今後の考古学や歴史学の研究にさまざまな影響をおよぼす重要な資料も多い。

発掘調査の正報告書は、後日刊行の予定であるが、とりあえず本年度の発掘調査の経緯と調査成果をとりまとめ、その概要を報告し貢献をいたしたい。本書が、湖西地方の歴史を考えるために資料となれば幸いである。

なお最後に、調査に協力を惜しまれなかった関係者、地元新旭町、同町教育委員会の各位に感謝したい。

昭和58年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化財保護課長

外池忠雄

例　　言

1. 本書は、建設省の実施する国道161号線バイパス工事に伴う、高島郡新旭町所在新庄城遺跡、正伝寺南遺跡、針江中遺跡、針江北遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、「一般国道161号（高島バイパス）新旭町内遺跡発掘調査」として建設省からの委託（39790000円）を受けて滋賀県が実施した。
3. 調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会技師宮崎幹也、清水尚、同嘱託尾崎好則を主任調査員に得て実施した。
4. 調査にあたっては、新旭町、新旭町教育委員会ならびに同委員会主事岡司高志氏から格別の配慮を賜った。記してお礼申しあげたい。
5. 調査・整理にあたっては、以下の諸氏の参加と協力を得た。
　神谷友和（滋賀県文化財保護協会技師）、山口順子（滋賀県埋蔵文化財センター嘱託）、堀内宏司（調査員）、木村哲基（奈良大学OB）、池田俊哉（龍谷大学）、和田光生（大谷大学）、柿本秀作（花園大学）、上田永人、岩本芳幸、小原慎一、齊藤博史（追手門学院大学）、宮川きよ子、中川正人（主任調査員・保存科学）、寿福滋（主任調査員・写真）。
6. 本書は第1章を兼康保明、第2章を宮崎幹也、清水尚、第3章を中川正人、第4章を清水、堀内宏司、第5章、第6章を尾崎好則、山口順子、兼康が執筆し、全員で討議のち兼康が総括、編集した。
7. 図面作成、整図は調査者全員があたり、写真撮影は、現場では各主任調査員、遺物撮影は寿福滋が行った。
8. 調査実施にあたっては、文化庁記念物課浪貝毅氏、保存処理については奈良国立文化財研究所沢田正昭、秋山隆保両氏の指導をうけた。文末ながら記してお礼申しあげたい。

目 次

はしがき

例 言

第1章 調査の経過..... 1

第2章 新庄城遺跡の調査..... 4

1. 遺跡の概要
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

第3章 新庄城遺跡出土漆膜の保存処理..... 14

1. はじめに
2. 小札の顕微鏡による観察
3. 丹塗り漆被膜の保存処理
4. まとめ

第4章 正伝寺南遺跡の調査..... 18

1. 遺跡の概要
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

第5章 針江中遺跡の調査..... 25

1. 層 位
2. 遺 構
3. 遺 物
4. 小 結

第6章 針江北遺跡の調査..... 32

1. 層 位
2. 遺 構
3. 遺 物
4. 小 結

図版目次

- 図版1 新庄城遺跡・遺構
(上) 調査開始時の状況(南東より)
(下) 第12トレンチ調査状況(南西より)
- 図版2 新庄城遺跡・遺構
(上) 第7トレンチ堀全景(西より)
(下) 第9トレンチ石列全景(北西より)
- 図版3 新庄城遺跡・遺構
(上) 第12トレンチ土壘状遺構(北西より)
(下) 第15トレンチ石敷遺構(南より)
- 図版4 新庄城遺跡・遺構
(上) 第12トレンチS E 1
(下) 第12トレンチS K 1
- 図版5 新庄城遺跡・遺物
(上) 輸入磁器
(下) 土師質土器・皿
- 図版6 新庄城遺跡・遺物(輸入磁器)
- 図版7 新庄城遺跡・遺物
- 図版8 正伝寺南遺跡・遺構
(上) 西トレンチ全景(南より)
(下) 東トレンチ全景(南より)
- 図版9 正伝寺南遺跡・遺物
- 図版10 正伝寺南遺跡・遺物
- 図版11 針江中遺跡・遺構
(上) A地区南半部(北より)
(下) SK 3着柄鉗出土状況
- 図版12 針江中遺跡・遺構
(上) A地区北半部(南より)
(下) SK 8・SD 2遺物出土状況(南より)
- 図版13 針江中遺跡・遺物
- 図版14 針江北遺跡・遺構
(上) A地区全景(南より)

- (下) B地区全景(南より)
- 図版15 針江北遺跡・遺構
(上) S B 2 (西より)
(下) S B 3 (西より)
- 図版16 針江北遺跡・遺構
(上) S K 10 遺物出土状況
(下) S E 1 曲物出土状況
- 図版17 針江北遺跡・遺構
(上) S D 18 遺物出土状況(南より)
(下) S D 17 遺物出土状況(西より)
- 図版18 針江北遺跡・遺物
- 図版19 針江北遺跡・遺物
- 図版20 針江中遺跡・着柄鋤
- 図版21 針江中、北遺跡・木製品
- 図版22 針江北遺跡・木製品
- 図版23 崎辺遺跡分布図
- 図版24 新庄城遺跡・遺構平面図(1)
- 図版25 新庄城遺跡・遺構平面図(2)
- 図版26 新庄城遺跡・遺構平面図(3)
- 図版27 正伝寺南遺跡・遺構平面図
- 図版28 針江中遺跡・A地区遺構平面図
- 図版29 針江中遺跡・B地区遺構平面図
- 図版30 針江北遺跡・遺構平面図
- 図版31 新庄城遺跡・土器実測図(1)
- 図版32 新庄城遺跡・土器実測図(2)
- 図版33 正伝寺南遺跡・土器実測図(1)
- 図版34 正伝寺南遺跡・土器実測図(2)
- 図版35 針江中遺跡・土器実測図
- 図版36 針江北遺跡・土器実測図
- 図版37 針江中・北遺跡・木製品実測図(1)
- 図版38 針江中・北遺跡・木製品実測図(2)

挿 図 目 次

第1図	新庄城遺跡トレンチ配置図	1
第2図	針江中、北遺跡トレンチ配置図	2
第3図	正伝寺南遺跡トレンチ配置図	3
第4図	S E 1、2実測図	7
第5図	石臼拓影	11
第6図	漆膜の保存処理（1）	15
第7図	漆膜の保存処理（2）	16
第8図	S D 1土器集中箇所	21
第9図	S D 1出土軒丸瓦	23
第10図	S K 3遺構実測図	26
第11図	S K 8遺構実測図	26
第12図	製塙土器実測図	29
第13図	下層出土の土器	29
第14図	勾玉	30
第15図	森浜遺跡出土の柄	31
第16図	着納鉢・鋤の着納状態	31
第17図	S E 1遺構実測図	32
第18図	県下出土の石庖丁形木製品	38
第19図	石川県羽咋市吉崎・次場遺跡出土例	39

第1章 調査の経過

昭和57年度の新庄町内における国道161号線バイパス関連遺跡の調査は、昭和55、^①56年度の試掘調査、昭和56年度の旭遺跡における試験調査の結果を基礎資料として本格的に開始された。調査の方法については、滋賀国道工事事務所と滋賀県教育委員会の関係者間で協議した結果、試掘調査で明らかになった遺構面と地下水位の高さの検討から、今年度については遺構面の検出が地表より比較的浅い部分でなされた地域より、矢板を使用せずに素掘りで行うことになった。

発掘調査は、昭和57年6月29日よりまず新庄城遺跡から着手した。新庄城遺跡については、試掘調査の結果遺構検出面が浅かったため、当初は路線内の各水田ごとに発掘し、随時2インチの動力ポンプで排水していたが、伏流水等の影響で湧水量が予想以上に増加し、最終的には大がかりに排水溝を掘り、4インチの電動ポンプで昼夜排水せねばならない事態となった。調査は戦国時代末期に文献にあらわれる新庄城の二ノ丸と思われる場所を発掘し、上下二層に複合する遺構を検出した。また、二ノ丸の北側では堀らしい遺構も確認され記録を傍証するという所期的目的



第1図 新庄城遺跡トレンチ配置図

を達成した。次年度以降に残された問題としては、本年度調査地の南側の安曇川堤防付近にまで遺構が広がる可能性があり、引き続き調査の必要がある。

針江遺跡群については、昭和57年7月2日より針江大川の北約120mの地点より北に向けて調査を開始した。



第2図 針江中、北遺跡トレンチ配置図

調査は試掘トレンチ1～

11で確認された針江中遺跡
で、古墳時代中期～後期前
半の時期を中心とした遺物
包含層と遺構群を検出した。
統いて、針江中遺跡と針江
北遺跡の中間地点で、試掘
の際に遺物包含層が検出さ
れた試掘トレンチ18の周囲
を拡張した。その結果、試
掘で確認された遺物包含層
は再堆積によるもので、そ
の分布範囲も狭く、遺物出
土量も微量であった。

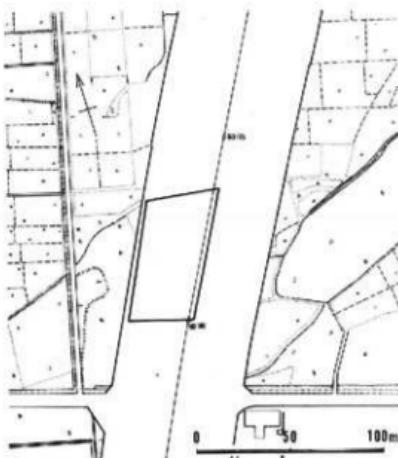
試掘トレンチ25～37で確
認された針江北遺跡では、
南半部で古墳時代前期の土
器や木器の出土する溝や、
平安時代前期の掘立柱建物
や井戸などが検出された。
平安時代の遺構については、
互いに関連性を持ち集落内
における一単位を把握する
ことのできる好資料であっ

た。北半では、北へ行くほど遺物包含層がしだいに薄くなり、やがて基盤は氾濫原の砂利層となり、遺跡はいったん途切れてしまう。

針江中、針江北両遺跡の調査は、トレンチの壁面の崩れが隣接する水田に影響をおよぼしたり、あるいは逆に水田側からの水の流入があるため、調査途中より道路敷地と隣接する水田の間に仮設道路を設けた。そのため調査面積は縮小したが、その反面

この道路により軟弱地への機械、資材の運搬が容易となり、隣接する水田より不時の水の流入、苦情はなくなった。排水は、調査区の四周に排水溝を掘り、昼夜大型の水中ポンプで排水することにより完全に遺構面を乾すことができた。

正伝寺南遺跡は、地元の要望により年度途中であったが調査員の増員が実現し、昭和57年11月1日より試掘調査で範囲確認された遺跡の南端部より北に向って12月22日まで発掘調査を実施した。調査の結果、砂礫層をベースに古墳時代前～中期の遺物や、飛鳥時代の遺物を多数含む溝や土坑などが検出された。ただ、この調査区は地下水の湧水点が高く、また伏流水の影響もあってか、針江中、北の両遺跡にくらべ排水が思うにまかせず、次年度の調査予定地区が現在も沼地状を呈しており、排水法について抜本的な対策が必要である。



第3図 正伝寺南遺跡トレンチ配置図

第2章 新庄城遺跡の調査

1. 遺跡の概要

新庄城遺跡は、新旭町新庄に所在し、新旭南小学校の南側を東西に走る県道北舟木・北畠線を北限とし、安曇川の堤防を南限とする範囲が推定されている。『高島郡誌⁽⁵⁾』によれば、明治時代までは付近に二つの小丘があり新庄城の旧状を残していたといわれるが、明治37年（1904）の大洪水や明治39年（1906）の耕地整理などによって、小丘は崩され旧状を失い現在の状況となった。ただ付近一帯には、「城ノ内」、「二ノ丸」、「三ノ丸」、「馬カケ道」など城跡をしのばせる小字名が残っている。

新庄城の沿革は、初期には高島佐々木一族の一人で高島七頭の新庄伊賀守実秀の居城と伝えられている。また、永祿年間（16世紀中葉）に、饗庭野丘陵の南東端にある日高山城（清水山城）の出城として佐々木越中守の家臣多胡上野介久秀が守備したともいわれている。天正元年（1573）に織田信長の家臣磯野丹波守昌が郡内の支配を目的として入城したが、天正6年（1578）に昌が遂電した後、織田信澄が高島町の大溝城に城を移したため廢城となった。

2. 層位

基本となる層位は、耕土・床土の堆積が約20cmあり、その下に二～三層の砂層、砂礫層、砂質土層の堆積が約10～30cm見られ、遺構面に至っている。遺構面は、今回調査した範囲の北部から中央部にかけて黄褐色砂礫層、南西部では黄灰色粘質土層を基盤としている。

調査区域内における遺構面は、概ね一面であるが、第8、第15トレンチに限り二面確認された。このうち第15トレンチの層位を具体的に見てみよう。第15トレンチでは、地表下30～46cmにある暗茶褐色粘質土層が遺物を多く包含する。この遺物包含層を掘下げたところで、上層の遺構面が検出された。この上部遺構面では、南北方向に伸びる石敷遺構、ピット群、小溝群などが確認された。次に、上部遺構面を除去し、さらに地表下56～60cmにある灰白色粘質土層を掘下げたところで、下層の遺構面を検出した。この下部遺構面では、東西方向に伸びる土壙、土坑、集石遺構などが確認された。

上部、下部二つの遺構面は、現状では出土遺物を見るかぎり時期差はほとんど認め

られない。おそらくこの二遺構面の形成は、短期間における遺構の再構成によるものと考えられる。

下部遺構面の下にある、約15~20cmの淡灰褐色粘土層中にも遺物が包含されているが、この層中の遺物で最も新しい時期のものは、遺構面出土の土師質小皿と同種のものである。こうしたことから、この層は築城時の整地層と理解している。

3. 遺構

今回の調査により、新庄城は第7トレンチで検出された堀を遺構の北限とすることが明らかになった。また、第8、第9トレンチの石列遺構の伸びからみて、新庄城の遺構が東側に隣接する工場敷地内へと続くことが確認された。さらに、第12トレンチの土塁状遺構より西にも、遺構が存在することが判明した。

以下、主要な遺構の概要をみてみよう。

(1) 堀 第7トレンチで検出された東西に伸びる溝状遺構は、溝幅約5m、長さ53.4m以上に及ぶもので、深さ24~82cmを測り、溝の断面形はU字型をしている。この溝状遺構は、西側が直線的に伸びるのに対し、東側では蛇行しながらだいに浅くなつて行く。

溝内の土層は、大きく三層に分けることができる。まず上層は砂礫層で、明治時代の瓦や陶磁器類を遺物として包含している。中層は砂質土層で、遺物はあまり包含しない。下層は湧水の激しい粘質土層で、16世紀代の土師質土器や陶器などを包含している。この三層のうち、上層と中層は溝内のはば全域にわたって認められるが、下層だけは西側約1/3の区域のみに認められる。

この溝状遺構を境として、北側と南側では遺構や遺物包含層のあり方が全く様相を異にすることや、旧地籍図にみえる小字「城ノ内」の北限に近いことなどから、この溝状遺構は、新庄城の北を限る堀の一部と考えられる。

(2) 石列遺構 第8、第9トレンチで、南北方向に伸びる石列と、その両端部から東へ折れて伸びる石列が検出された。

南北方向に伸びる石列は、中央部が河川の氾濫を示す砂礫によって切断されているが、復原すると約37m続く。南北方向の石列は、北端部で直角に東へ折曲り、そのまま約20m伸びる。また、南端部では、45°ずつ2回折曲り東へ伸びている。

この石列には、人頭大の河原石を1個ずつ横にならべた部分と、拳大の礫を幅50～60cmでならべた部分がある。しかし、いずれも上部が削平されており、本来の構造が今一つ明らかではない。ただ、石列の外側（西側）では何等の遺構も認められなかつたが、内側（東側）ではピット群、土坑、溝などの遺構が確認され、遺物の出土量も外側にくらべて圧倒的に多い。こうしたことから、石列の性格は、屋敷地を限定する遺構の基礎と考えられ、一つの考え方としては、石垣の基礎部ともとられる。

(3) 土壘状遺構 第10、第12トレンチで、南北方向に伸びる土壘と思われる遺構が検出された。

土壘の幅は、上部で0.8m、下部で2.2mあり、約568mの距離調査した。第12トレンチでは、土壘の西面の裾部に、二段ほどの石組を確認した。それに対し東面は、調査時に設けた排水溝で破壊しており、その構造の詳細は不明な点が多い。東面の構造を北接する第10トレンチの断面で判断するかぎり、土壘の西側と東側では遺構面の高さが異っており、一段と高い東側では石組は認められなかった。この土壘は、現在の畦道の真下にあたり、旧地籍図にみえる小字の「城ノ内」と「二ノ丸」の境界線上にあたる。

土壘の性格を考える時、土壘より東の第11トレンチでは、遺構や遺物包含層が確認されなかつたのに対し、土壘より西の第12、14、15トレンチでは、遺構、遺物とも多数検出されている。こうしたことから、この土壘は、新庄城内における一つの遺構の東限を示すものと考えられる。

(4) 井戸 土壘のすぐ東で、新庄城の遺構面に伴う16世紀代の2基の石組井戸が検出された。

SE1 赤褐色砂礫層に掘られた円筒型の内径約80cmの石組井戸で、掘方は組石の外約10cmほどの狭いもので、掘方平面径約1.5mを測り、深さは96cmである。石組は、河原石を底から約6段ほど積上げたもので、石の積み方は、石の短辺を内面とすることを原則としている。しかし、一部長辺を内面とする箇所も見受けられた。井戸の砂礫層は、ひじょうによくしまって安定しており、石組の底に陣木などの施設は確認されなかつた。

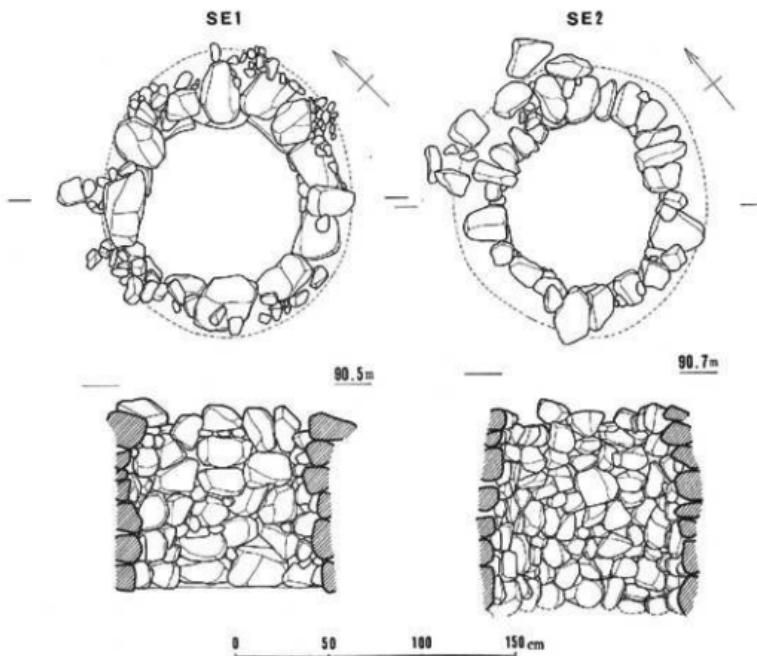
井戸内の埋土には、焼けた河原石が投入されていた他、遺物はあまり出土しなかつた。

SE 2 SE 2は、SE 1の北西9mの地点にあり、約20cm高くなつた遺構面（赤褐色砂礫層）に掘られた石組の井戸で、上部がすばまた袋状の石組井戸に近い形狀を示している。井戸の内径は、上部で約85cm、下部で約1mを測り、掘方平面径約1.45mで、SE 1にくらべ掘方と石組との間隔が広い。

SE 2は、深さ約1mのところまで実測を行い、さらに掘下げたが、SE 1の底部湧水砂礫層のレベルより下ってもまだ底部が確認されなかつた。この段階で湧水が激しく、石組の強度が不安定であったため、調査途中であったが安全のため中止した。

井戸の構造は、SE 1同様自然石の石組によるもので、井戸の埋土にはやはりSE 1と同様焼けた河原石が投込まれていたが、遺物は出土しなかつた。

(5) 土坑 SK 1 第12トレンチの南端で、直径約3mほどの土坑が検出された。この土坑の掘込みは、ほぼ垂直に近く、深さ37cmを測る。土坑内には、土師質土



第4図 SE 1、2、実測図

器や陶器、青花磁器などが含まれており、特筆すべき遺物として革紐綴の甲冑の小札が出土した。また、土坑最下層からは、円弧状に漆被膜が幅約10cm、長さ70cmにわたって検出された。

土坑の性格は不明であるが、上層でみられる河原石が一方から流入したような状況を示していることから、周囲の整地に伴う整理坑とも考えられる。

(6) 石敷遺構 第15トレンチで、幅約1.0~1.4mの南北に伸びる石敷遺構が28m検出された。この遺構は、第12トレンチで検出された土塁より約31m離れてほぼ平行している。

遺構の性格は不明であるが、西隣で間隔を保って直交する土塁など西側の遺構をとりまく犬走りとなり得る可能性もある。

(7) 土塁 第15トレンチの南西隅で、石敷遺構とほぼ直交する向きの土塁の基礎を約5mに検出した。石敷遺構に近づく東側では破損が激しいが、トレンチの西壁寄りでは幅160m、高さ30cmを測り、南北両側面に人頭大の河原石をもちいた石列が認められる。

(8) 集石遺構 第15トレンチの北東隅で、直径10~40cm大の河原石を南北2.3m、東西2.2mの範囲で、高さ約40cmに積上げた遺構を検出した。この集石は、SE1、2の検出状況に似ており、当初は井戸を埋めたものかと考えていたが、集石を除去するとわずかに落込みが確認されただけであった。なお、この集石中には、板碑や石臼などが含まれていた。

4. 遺 物

(1) 土師質土器 土師質土器のはほとんどは皿で、小皿(1~20)、中皿(21)、大皿(22~24)の三種類が認められるが、出土量は小皿が最も多く、全体の9割を占める。また皿の中には、二種の形態の異なったものがある。一つは、器形に何の特徴もなく、器壁が厚く、横ナデが内面のみに認められ、外面はわずかに口縁端部付近しか施さないもの(1~5)で、小皿に限られている。それに対して、口縁端部を丸くおさめ、端部内面に沈線をもつ、大、中、小皿(6~24)がある。出土状況からみると、この二種の土師皿は同一層内で認められるが、前者は第8、9トレンチの石列に囲まれた内側の包含層で多く出土し、後者は第7トレンチの堀の下層より多く出土し

た。

土師質土器はこの他に、わずかな量ではあるが、底部中央の突出したヘソ皿（25）や、片口擂鉢のミニチュア（26）などがある。

（2）瓦質土器 火舎は、直立する短い口縁部と丸い肩部をもち、肩部に透しのあるもの（33）と、口縁部が内湾し体部に透し孔をあけるもの（34）とがある。（34）は、内面の口縁部付近に火を強く受けたあとがあり、内暈はひじょうに荒れている。

第15トレンチの整地層から、土鍋（39）が1点出土しているが、形態などからみて他の遺物より一時期古いものであろう。

（3）陶器 信楽、常滑、瀬戸、越前など国産の、擂鉢、甕、壺、天目茶碗、皿など各種器形が出土している。

擂鉢（35～38）は陶器の中では出土量が多いが、完形品になるものは少なかった。產地としては、口縁部内面に太い沈線をもち、条線は4条を1単位とし間隔が広く、軟質の越前（35）と、やや内湾気味に立上る口縁部と、4条が1単位の条線をもつ、硬質で胎土に長石を含む信楽（37）が大半を占める。また、口縁端部を肥厚させるもの（36）や、肉厚で口縁上端部が水平になるもの（38）などがある。

天目茶碗は瀬戸のもので、約10個体ほど出土している。（27）は、口縁部にくびれをもち、淡茶褐色の釉がかかる。

皿も瀬戸のもので、平底と内湾気味に立上る口縁部からなるもの（28）と、おろし皿（29）がある。

甕は、信楽、常滑、越前のものがある。ここでは、ひじょうに退化したN字口縁の、口径約56cmを測る大形の甕（30）を図示しておく。また、肩部外面に格子と「本」字の押印をもつ越前の大甕がある。その他、1例だけではあるが、備前にみられる玉縁状の口縁のものも出土している。

壺は、信楽が2個体あり、肩の強く張るもの（31）と、あまり張らない卵型のもの（32）とが認められる。

（4）輸入磁器 青磁・白磁・青花などの輸入磁器が多量に出土している。

青磁には、碗、盤、鉢がある。

碗は、a - 雷文帯をもつもの（41～43）、b - 蓮弁文をもつもの（44～46）に分類される。aには、ヘラ片彫り（41、42）と刻線（43）の二手法が見られ、釉調にも、

青白色（42）と深緑（41～43）の二種類がある。bには、蓮弁をヘラ片彫りによって大きくするもの（46）と比較的深いヘラ彫りの放射状線と波状の剣頭文の組み合せによるもの（44）、放射刻線によるもの（45）がある。

釉調は（46）が青灰色を発色する他、いずれも深緑色である、（46）の見込みには、園線が廻る。（47）は体部下半より高台まで残存し、文様構成等は判然としない。器壁、高台はかなり肉厚で、内外面共に貫入が激しい。淡い光沢の青灰緑色の釉調で、高台内は露胎である。

盤（48）は、稜花状口縁を有し、体部内外面に丸ノミ状工具による蓮弁文を配するものである。口縁帯には二条の園線が廻り、高台は断面四角形を呈する。

鉢（49）は稜花小鉢で、体部下半が稜を為すタイプである。体部内面には刻花文を観察する。

白磁には、碗・皿・壺がある。

碗（50、52）はいずれも端反りで、（50）の口縁端部には鉄釉が施され、体部内面には型押しによる菊花唐草文がみられる。

皿には、疊付きに抉りを持つタイプ（53）と端反りタイプ（51）の二種類がある。

（54）は青白磁の梅瓶の胴部片と考えられるものである。内外面にガラス質釉を施す。

青花には、碗・皿がある。

碗には、端反りのもの（58）、内窵して端部をおさめるもの（59）、高台のみ残存するもの（65）がある。

皿には、端反りのもの（55、56、57、62）、陶質で、黒味を帯びた眞須發色を呈するもの（61、64）、高台のみ残存し、全形状を把握し得ないものなどがある。（62）はいわゆる「つば皿」で、輪花口縁を有し、体部に放射刻線を配するもので、第12トレンチのSK1から出土した。（61）は基筒底で、体部外面に芭蕉文を描き、（64）は断面四角形の高台を持つ。（60）は玉取獅子を描く底部小片である。

（5）石製品 石製品には、硯と石臼、板碑などがある。

硯は、幅5.0cm、高さ1.0cmを測る細長い長方形のもので半損しており、海部付近を残す。

石臼は、4個体出土しており、うち2個体は茶臼である。臼は、淡灰白色を呈する

花崗岩製で、上臼と下臼が各1個ずつ出土しているが、別個体である。いずれも直径1尺のもので目を8分画したもので、目の断面形状は丸型である。

茶臼は、いずれも上臼で、直径5寸のものと、6寸のものとがある。5寸のものは約11本前後の条線が約6mm間隔で施されており、6寸のものは約18本前後の条線が3mm間隔で施されている。目の断面形状はV字形をしている。

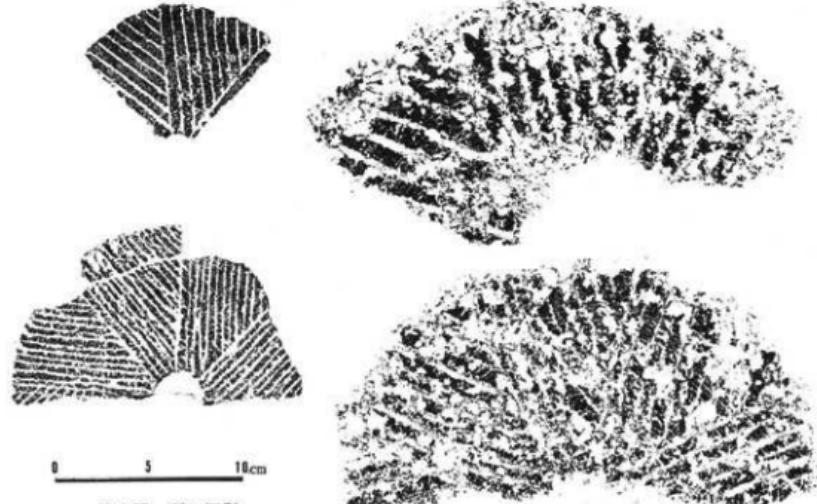
板碑は第15トレンチ北東隅の集石遺構から出土した。(68)。が1体出土した。総高41.0cm、最大幅27.2cm、像高17.0cmを測り当方で一般的にみられる花崗岩製の弥陀一尊板碑である。

(6) 銭貨・金属製品 第12トレンチの遺構面から、北宋錢の元豐通宝が1枚出土した(69)。

金属製品としては鉄製の釘が多量に出土しているが、瓦釘は認められなかった。銅製品では、長さ9.7cmを測るキセルの吸口があるが(70)、江戸時代のものと思われる。

(7) その他 少量ではあるが、須恵器の甕の体部破片(40)が数点と、瓦の破片が2個体出土している。瓦は、丸瓦の差し口の部分である。

注目すべき遺物としては、坩堝の破片が数個体出土している。(71)は、残存部の



第5図 石臼拓影

高さ 10.7cm、復元径約 21.8cm、器壁の厚さ 4.2 cmを測る。外面は赤褐色を呈し、土師質ではあるが、内面は暗緑褐色のガラス質でおおわれている。

5. 小 結

(1) 遺構の広がりとその性格 今回の調査で検出された遺構は、第 7・8・9・11・12・14・15 レンチに集中している。

第 7 レンチの中央で検出された溝状遺構は、同遺構以北では、遺物包含層や遺構が一切確認されなかったことから、新庄城の北端を限る堀の一部と考えられた。溝内の層位堆積状況からみてこの堀は、明治時代の耕地整理の頃までわずかにその痕跡が地表に残存していたようである。

第 8・9 レンチで検出された石列は、本丸と推定される部分の遺構を区切るもので、石列以東が本丸の範囲となる。このことから、本丸の遺構はバイパス以東の工場内に存在する。この区域では、上・下 2 層の遺物包含層が確認され、輸入磁器・国産陶器をはじめとして多量の遺物が出土したが、建物遺構は確認されなかった。

第 11・12 レンチで検出された土壘状遺構が明確に土壘となるなら、二ノ丸および三ノ丸関係の遺構を区切るものであろう。この区域では、井戸・土坑・集石遺構・ピット群・石敷遺構・土壠などが検出されており、遺物も多量に出土した。

第 15 レンチの石敷遺構の東側では、上・下 2 層の遺物包含層と、さらに下層で築城時の整地面が確認された。出土遺物中にみられる須恵器や土師質土器のヘソ皿、瓦質土器の土鍋といったものは、整地の際に混入した新庄城以前の遺物と考えられる。

二ノ丸・三ノ丸の主要建物遺構は、おそらく石敷以西であると考えられ、短期間に内に遺構面の重複が見られるのも、主要建物の外側であるためと考えられる。

新庄城遺跡はさらに南西部に続いており、今回の調査の南限となった土手の裾部を断ち割ったところ、土手の直下から明治時代頃の溝が検出された。このことから、現存する土手は明治時代以降のものであり、遺跡の広がりが土手によって限定されるとはないと思われる。

(2) 遺構の年代 第 8・15 レンチでは、重複した遺構面・遺物包含層が検出されたが、出土遺物に差異がほとんど無く、出土した遺物の年代観から 16 世紀代の比較的短期間のものと考えられる。

なお遺構のうちで、下層に属するものは、石組、井戸、土壙、土坑、集石遺構で、上層に属するものとしては、石敷遺構があげられる。また、上層の遺構面には等間隔の小溝群が認められ、新庄城遺跡においては、この種の遺構が比較的新しく、廃城後の時期の所産としてとらえられる。

(3) 遺物の傾向 土師質土器については、小皿にみられる二種類の形態差が、時期によるものではなく、地城色の強いものと、畿内の広範囲でみられる一般的なものとの差であると考え、今後、同時期の遺跡で比較検討する必要があろう。

国産陶器は、信楽、常滑、越前の製品が出土しているが、中でも、越前の擂鉢や甕が多くみられる。現在のところ中世を通じて、湖西の各遺跡から出土する越前の量はそう多いものではないが、おそらく戦国時代末期から安土・桃山時代にかけて、越前の流通圏が近江の北半まで伸びてきたことによるのではないであろうか。

また、国産陶器の甕の中には、口縁部が玉縁状になる備前の甕を思わせるものも1点含まれている。同時期、湖南西岸では備前が認められるが、本資料がはたして備前であるかどうか、現段階では明らかでない。今後の調査によって、產地の比定などのおこなえる資料が増えるものと予想される。

輸入磁器は、青磁・白磁・青花磁器が出土しており、いずれも明代を主流とするものである。新庄城の存続年数は非常に短かく、これら輸入磁器の使用年代が限定されることからも、資料的価値の高いものといえよう。

瓦や瓦釘の出土がほとんどなかった事は、新庄城の建物が、杉皮葺・板葺もしくは桧皮葺であったと考えられる。出土した2点の瓦についても、丸瓦とは限らず、棟に使われた「輪違い瓦」になる可能性がある。

第3章 新庄城遺跡出土漆膜の保存処理

1. はじめに

新庄城遺跡における今回の発掘調査で同遺跡第12トレンチ・SK1より出土の漆被膜の保存処理を実施した。同土坑からは甲冑の部材（小札）とみられるもの（第6図-1）と、下層より出土の朱塗りの漆被膜の2点について保存処理の概要を述べる。県内においても近年漆器をはじめとする漆製遺物の出土が多数見られるが、漆は非常に安定した物質であり堅牢な塗膜を形成することから種々の器物の表面に塗布され重宝されてきた。しかしながら土中に長期間埋没することにより、たとえば漆椀ならば胎となる木質は腐朽のため軟弱化し脆くなっている。またほとんど土と化し、表面に漆被膜のみが残存する場合すら見られる。これらの遺物は発掘後安易に乾燥させるならば、その形状を保つことなく粉化し崩壊してゆくであろう。こうした出土漆器の保存のために現在も研究が続けられている。

2. 小札の顕微鏡による観察

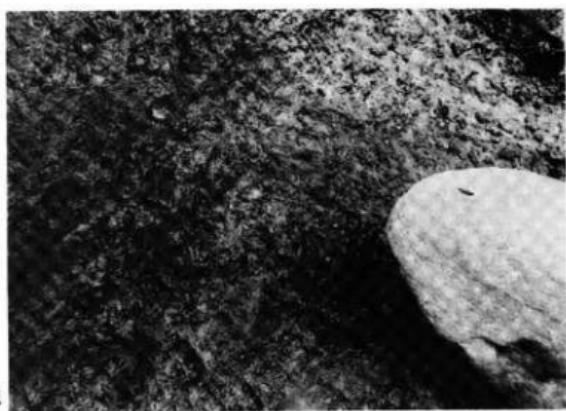
甲冑のどの部位にあたるかは、出土漆被膜が余りにも小片であるため推測すら不可能である。この漆被膜は50mm×45mm程度の破片で、厚さは0.5mm～0.8mmの比較的しっかりしたものである。この小札は鉄製の細板に穴をあけ、革紐で綴じ合わせたのち漆を塗ったものと思われ、鉄地は腐食のため溶出し漆被膜のみが残存した。綴じた痕跡が裏面より観察できる。

漆被膜の小破片をアクリル樹脂により包埋し研磨し断面の顕微鏡による観察を行った結果、基本的に3層の被膜が確認できた。（第6図-3）、各層の間には細砂が流入し各層をもち上げた様相を呈している。漆を塗布する際に、漆に砥粉などの混ぜ物を混入し下地としたかは単なる光学顕微鏡での観察では限界であり、技法的な諸問題とも関連して考慮すべきである。

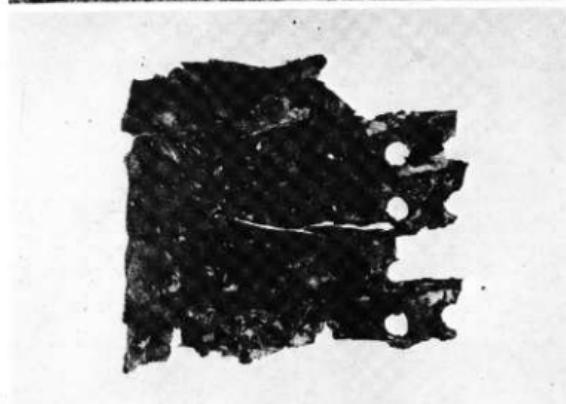
3. 朱塗り漆被膜の保存処理

朱塗り漆被膜はSK1より円孤状に連なった形で出土している。漆被膜裏面に皮革様の薄い膜が付随しており、漆皮製の器物が考えられるが器種は不明である。これらの

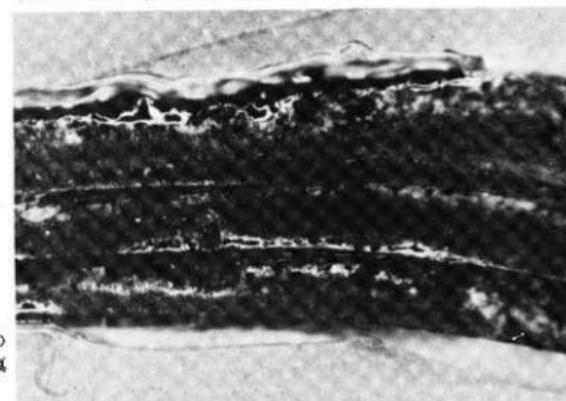
(1)
土坑1
小札出土状況



(2) 小 札

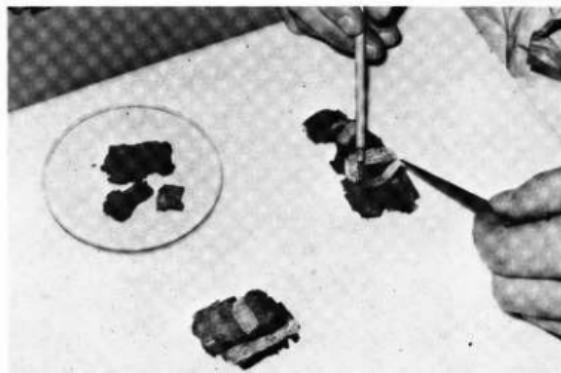


(3)
小札の漆被膜の
断面顕微鏡写真
倍率×50

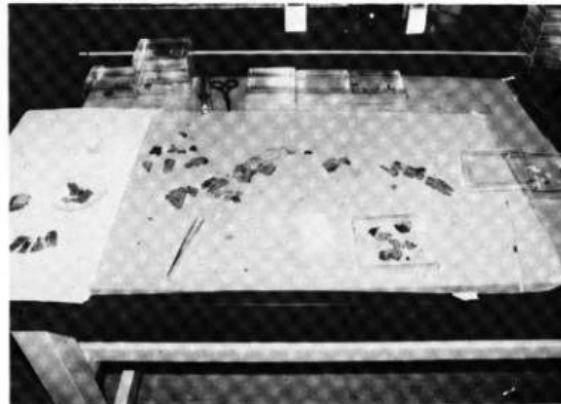




(4)
漆被膜の補強



(5)
漆被膜の接合



(6)
破片の照合作業

漆被膜は非常に薄く単独での取り上げは形状の損傷につながるため上と共に取り上げた。この様な漆被膜のみの保存処理法として、被膜を合成樹脂で個化し安定化させたち透明なシリコーンに封じ込める方法がある。この方法は保管容器内の移動がなく破片の損失を防ぎ、透明な膜に包まれるため観察が容易であることがあげられ、また必要ならば、シリコーン膜は取り除くことが可能である。以下にこの保存処理法を作業工程に従って述べる。

- a、遺構より土と共に漆被膜を取り上げる。
- b、被膜表面を和紙で養生し裏面の土を取り除く。
- c、漆被膜のみをアクリル製ケース内で除々に乾燥させる
- d、充分乾燥させたのち漆被膜を合成樹脂で補強する。（パラロイド・B-72・5%トルエン溶液使用）（第7図-4）
- e、漆被膜の破片を裏面よりガーゼで継ぐ。（ガーゼをテープ状に切り、セメダインcの酢酸エチル溶液で接合させる。）（第7図-5）
- f、実寸の実測図と照合し破片を整理する。（第7図-6）
- g、アクリルケース（55×35×3cm）の下層にまず透明シリコーンを流し固化させ、漆被膜を実測図に従って配列し、さらに透明シリコーンを流し封じ込める。（信越シリコーン・K108 使用）

4.まとめ

今回保存処理を実施した漆膜と同様な脆弱な遺物が今後も出土することが考えられ、胎を失った被膜といえども、その中世の技法を考察するうえで貴重な資料である。

第4章 正伝寺南遺跡の調査

1. 遺跡の概要

調査対象のバイパス工事予定地内における正伝寺南遺跡は、町道平井葉園線を南端境界として北へ展開し、霜降と深溝を結ぶ道路を隔てて針江南遺跡と接している。当遺跡については試掘調査の結果、上層に歴史時代、下層に弥生時代の遺物包含層および遺構が重複していることが明らかになった。

今回の調査地は、遺跡南端部の試掘トレンチ26～33の範囲で、バイパスセンターより西側の部分である。遺構は、地表下約35cm～45cmの礫面より検出された土坑（窪地状遺構）と溝であった。

2. 層位

平均的に観察される層位は、第1層・耕土、第2層・暗黄灰色混礫土（床土）、第3層・暗灰褐色混礫土、第4層・暗青灰色礫層、第5層・暗青灰褐色砂利層である。

第1、2層は、耕土と床土で厚さ約25cmを測る。

第3層は、厚さ約10～20cmを測り、小礫がまばらに混入する。奈良時代末から平安時代の遺物包含層である。

第4層は、厚さ約30cmを測り、拳大の礫よりもなる礫層であるが、この礫面の窪みに古墳時代から飛鳥時代までの土器を包含する茶褐色混礫土の堆積がある。この第4層上面が、遺構検出面であった。第4層内は、上部でわずかに遺物の混入が認められるほか、無遺物層に近い状態で、第5層以下には遺物の包含、遺構など確認されなかつた。

西トレンチの南北方向壁面は、ほぼ基本層位の水平堆積であるが、東トレンチの北側では第5層が落込み、途中第3層が無く、代って試掘調査において遺構検出面と指摘のあった灰色粘質土が確認された。この層位の変化は、東トレンチ南端付近でも観察される。

3. 遺構

調査した遺構は、土坑（SK1～11）と溝（SD1～3）で、遺構の埋土はいずれ

も茶褐色混礫土の单一堆積であるが、SD 3のみ灰色弱粘質混礫土であった。

(1) 土坑 SK 1 西トレンチの西端中央付近で、東西方向に長径をとる約5.5m×3mの隅丸長方形をした土坑が検出された。土坑内の東側では、遺構検出面下約15cmの深さで礫面があらわれ、さらにそれより約10cmの深さで段状に落込み西側へ拡がる。西側では土坑の底面で、幅約60cm、深さ約5cmを測る溝が、また東南端では、楕円形をした80cm×50cm、深さ約15cmのピットが検出された。

土坑内からは、飛鳥時代の須恵器、土師器が出土した。

SK 2 SK 1の南側に位置し、南北に最大幅約5.4mを測る不整形な土坑で、東側に突出部分がある。遺構検出面下約20cmのところで礫面となる。また、土坑内の西端で直径約80cm、深さ約15cmの円形ピットが検出された。出土遺物は、SK 1と同じ飛鳥時代の土師器、須恵器が出土している。

SK 3 SK 2の南側に位置し、一辺約3.8mの隅丸方形状を呈する。遺構検出面より約5cmの深さで礫面となる浅い土坑で、遺物は時期不詳の土師器片数点を検出したのみである。

SK 4 SK 3の南側で、西トレンチの南端に位置し、全形状は把握できないが、検出状況では直徑約6.5mの半円形を呈する。遺構検出面より約35～40cmで礫面となる。出土遺物は多く、布留式土器が大半を占めるが、飛鳥時代の土師器も若干混在する。

SK 5 SK 2の東側に位置し、約5m×4.5mの隅丸方形を呈し、遺構検出面下約25cmの深さで礫面となる。遺物は比較的多く、飛鳥時代の須形器、土師器が出土した。

SK 6 西トレンチの北西端に位置し、検出状況では約6.5m×11mの隅丸長方形である。土坑の東側より緩やかに落込み、深さは最も深い西端で約40～50cmを測る。出土遺物は多く、布留式土器が大半を占める。

SK 6とSD 1の間は、遺構検出面より約5cmの深さで西に向って礫面が落込み、さらに南北のSK 6、SD 1に落込む複雑な形状を呈している。

SK 7 東トレンチの北西端付近に位置し、現状では約5.5m×3mの長方形を呈する。遺構検出面から約10cmの深さで礫面となる。セクションの東側では、土器の集中する箇所がみられたが、西側ではごくわずかに出土したのみである。土器集中箇所

の遺物は、飛鳥時代の須恵器、土師器が大半を占めるが、わずかに奈良時代の土師器が混在する。

SK 8 東トレンチの西側中央よりやや南に位置し、約2.5m×2mの隅丸方形を呈する。遺構検出面より深さ約15cmで礫面となる。遺物は土師器の瓶片など破片数点を検出しているが、詳細は判然としない。

SK 9 東トレンチの西端中央よりやや南側に位置するが、西トレンチ内で検出されないことから、東西方向に約11.5mの長径をとる長円形状の不整形な土坑と考えられる。遺構検出面から深さ約15cmで礫面となる。出土遺物は少量で、時期不詳の須恵器、土師器の小片が出土している。

SK 10 東西南トレンチの中央南端に位置し、直径約4mの不整円形を呈する。遺構検出面から深さ約10cmで礫面となる。遺物はSK 9同様、時期不詳の須恵器、土師器の小片が出土したのみである。

SK 11 東トレンチ東側中央よりやや北側に位置し、土坑の北西側をSD 3によって切られている。南より北に向って緩やかに落込み、SD 3との接点で、遺構検出面下約10cmで礫面となる。遺物は古式土師器と飛鳥時代の須恵器、土師器が混在するが、量的には飛鳥時代の遺物が多いようである。

(2) 溝 **SD 1** 西トレンチ中央部を西流する溝で、排水溝を隔て東トレンチに連続するが、東へ約4m地点で限界をみる。溝中央部から西に向って南北に広がり、排水溝との接点で最大幅約21.5mを測る。東側は遺構検出面下約20cm、西端は約30cmの深さで礫面となる。本調査において最も多量に遺物を出土した遺構であり、一部溝の肩より底にかけて約4m×3mの範囲に遺物集中箇所が認められる(図版27、トン a部分)。

出土遺物の時期は、土器集中地区をはじめとして、その大半は庄内式から布留式の古式土師器からなるが、西端部では飛鳥時代の土器が比較的まとまって検出されている。

SD 1については、形態上溝(自然流路)と考えているが、茶褐色混礫土を埋土とすることや、流路としてはやや連続性を欠くことなどから、窪地状遺構となる可能性も残されている。

SD 2 西トレンチの北端中央に位置する、幅約60cmの北流する溝である。排水溝

に接する北端は、遺構検出面下約15cmの深さで礫面となる。遺物は、土師器片数点を検出しているが、時期不詳である。

SD 3 東トレーニングの北半中央を緩やかに蛇行しつつ北流する。現状では長さ45mを測るが、南北両端とも不明瞭な検出状況のため明確な数値を欠く。遺構の最小幅約3.5m、最大幅約11mを測り、南端付近では遺構検出面下約25cm、北端付近では約40cmで礫面となる。他遺構と異なる灰色弱粘質混礫土の埋土中からは、平安時代の遺物が出土地している。

4. 遺 物

本調査における出土遺物は、各遺構および遺物包含層より多量の土師器、須恵器が出土した。そのうち遺構に伴う遺物は、古墳時代、飛鳥時代、平安時代の三時期に大別される。

古墳時代の遺物を出土する遺構には、SD 1、SK 4、SK 6、SK 8があり、飛鳥時代はSD 1西端部、SK 1、SK 5、SK 7、平安時代の遺物はSD 3より出土している。

(1) 古墳時代の遺物

SD 1 最も多く土器を出土した遺構で、ことに土器集中箇所（図版27、トーンa部分）からは布留式土器がまとまって出土している。

(1)、(2)は、口縁端部内面を肥厚させる典型的な布留式の甕で、土器集中箇所の出土である。いずれも体部内面をヘラケズリし、外面は頸部と口縁部を横ナデし、(2)の体部にはハケ調整を施す。

(3)は、口縁部が無文の受口状口縁の甕で、体部外面はハケ調整を施す。なお外面には煤の付着が著しい。



第8図 SD 1 土器集中箇所

(5)、(6)は、小型丸底壺で、土器集中箇所の出土である。(5)は、頸部が器高のほぼ中心に位置し、底部がやや尖り気味になる。内面は、体部をヘラケズリし、口縁部に横ナデを施す。(6)は、頸部が器高のやや下位にあり、口径は体部最大径よりも大きい。体部は扁球形をなし、器体全面にヘラミガキを施す。

(11)、(12)は、土器集中箇所出土の器台で、いずれも三方に円孔を穿つ。

(15)、(16)は、同じく土器集中箇所出土の高坏である。(15)は、三方に円孔を穿つ脚部である。(16)は、全体に摩耗が激しいが典型的な布留式の高坏である。

SK 4 (9)は、器台の口縁部と考えているが、壺となる可能性もある。口径18.5cmの垂下口縁で、口縁帶に八条の櫛描波状文をめぐらし、その上に円形浮文と竹管文を交互に配する。受部内面には、櫛描波状文の痕跡が認められる。口縁部外面はハケ調整。

(13)、(14)は、三方に円孔を穿つ小型器台で、他に布留式の壺も出土している。

SK 6 他造構に比して多様な占式土師器を出土した造構である。

(4)は、小型壺で、口径と体部最大径がほぼ同じで丸底を呈する。

(8)は、口縁帶に4本一単位の棒状浮文をもつ壺で、各棒状浮文には刻み目がみられる。また、頸部から体部にかけては櫛描平行線文、体部上位に櫛描波状文がめぐる。

(10)は、高坏の脚部で三方に円孔をもつ。

SK 8 (7)は壺で、把手を欠損する。外面ハケ調整。

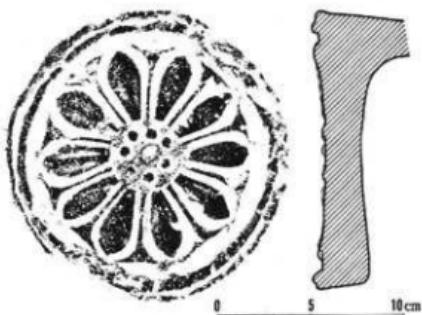
(2) 飛鳥時代の遺物

SD 1 西南端部 古式土師器が多く出土する造構であるが、西南端部で飛鳥時代の土器が比較的まとまって出土した。

(17)は、たちあがりの低い小型化した須恵器の壺身で、TK 217型式のものであろう。

(23)、(24)は、土師器の壺の口縁部で、(23)は口縁部外面が肉厚となり、口縁部内面にヘラ記号が認められる。体部内外面をハケ調整する。(24)は口縁部がくの字状に外反し、体部内外面をハケ調整する。

第9図は重弁軒丸瓦で上部より出土した。本調査唯一の出土瓦である。中房部の蓮子は1+7で、花弁は総体的に丁寧に作られている。瓦当縁および瓦当裏面にはていねいなナデが施されている。⁽⁴⁾



第9図 SD1出土軒丸瓦

SK 1 飛鳥時代の土器が多く出土した遺構で、土器の残存状況も他の遺構にくらべ良好である。

(18)は、(17)よりたちあがりが矮小化し、さらに小型化した須恵器の坏身で、底部は切離しのままである。

(22)は、土師器の椀で、口縁端部をわずかに外反させる。内面と

口縁部外面はていねいにナデ調整するが、体部および底面は不調整で指圧痕が著しい。

(25)は、近江型の口縁部をもつ把手付きの鍋で、口縁部内面にはヘラ記号がみられる。口縁部内面および体部内外面はハケ調整する。

(26)は、くの字状の口縁をもつ甕で、口縁端部を外側に肥厚させる。口縁部内面と体部内外面をハケ調整する。

SK 5 土器は、遺構の北東部よりまとまって出土した。

(20)は、頂部につまみと内面にかえりをもつ、須恵器の小型の坏蓋である。

(29)は、口縁が大きく開く土師器の鍋である。調整は、口縁部内面と体部内面、体部外面上半にハケ、体部外面下半をヘラケズリする。体部外面下半には煤の付着が著しい。

SK 7 出土遺物の大半は、土器集中箇所（図版27、トーンb部分）からのものである。

(19)は、須恵器の小型の坏身である。(21)は、宝珠つまみがつき内面にかえりをもつ、須恵器の大型の坏蓋である。胎土、つくりとも良く、天井部中央をヘラケズリする。全体に灰かぶりする。

(27)、(28)は、土師器の甕の口縁部で、(27)は口縁が内弯する近江型の長胴甕で、(28)は口縁が横外方に大きく開くものである。調整は、(27)が体部内外面ハケ調整で、外面に煤が付着する。(28)は体部外面がハケ、内面はナデ仕上げする。口縁部は、内外面を横ナデするが、ハケ目が残る。

(3) 平安時代の遺物

SK 2 遺構上面から少量の土器片が出土した。

(30)は、平底で底部に糸切り痕の残る須恵器の瓶である。

SD 3 平安時代の遺物を主に出土する遺構である。

(31)は、ロクロ成形の土師器の壺で、底部に糸切り痕が残る。

(32)は、須恵質の縄輪陶器の瓶の下半部である。やや高い高台をもち、先端部内面に稜をもつ。底部は縄輪が剥離しているが、全体に光沢ある輪を全面に施す。

5. 小 結

(1) 今回の調査においては、明確な生活址遺構の検出はなかったが、土坑、溝などから多量の土器が出土した。

(2) 遺構は、氾濫原の礫面上で検出された。礫原形成の要因となった河川の氾濫の流路方向は、ほぼ南西より北東にむかっている。

(3) SD 3を除く総ての遺構は、調査区域外で一つの窪地状遺構として集約される可能性がある。

(4) 出土遺物の時期は、古墳時代前、中期の庄内式、布留式土器が最も多く、次いで飛鳥時代の土器が多い。また、SD 3および包含層からは平安時代の土器が出土し、奈良時代の土器も少量包含層より検出されている。

(5) SD 1の土器集中箇所の布留式土器は、湖西の布留式前半期のまとまりある資料といえる。

(6) 飛鳥時代の土器は、7世紀前半から大津京時代までのものがあり、出土量も多く今後の整理作業によって細分が可能である。

第5章 針江中遺跡の調査

1. 層位

調査区間は、途中農道で分断されており、調査の便宜上農道より南側をA地区、北側をB地区とした。

基本層位は、第1層・耕土、第2層・黒褐色粘質土層（遺物包含層）、第3層・青灰色粘質土層で、各層の厚さは第1層約40cm、第2層10~15cmであった。このうち第2層中からは、布留式~5世紀末頃までの土師器や須恵器が出土しているが、少量平安時代の灰釉陶器や綠釉陶器、須恵器などの破片が混在する。この第2層を除去すると、第3層の上面で遺構が検出された。

A地区では、遺構検出後さらに北半部で第3層を精査しながら掘下げた。第3層は、厚さ約50cmで流木を多量に包含しており、また部分的に5~10cmほどの黒褐色粘質土層が認められ、数片の弥生時代中期（第IV様式）の上器が出土した。第4層は、青灰色砂利層となる。同様な下層の調査は、南半部の南東部でも実施したが、湧水と壁面の崩壊のため中途で断念せざるをえなかったが、やはり北半部と共に通した状況であった。ここでも、1片だけであるが、弥生時代中期と推定できる土器の小片が出土している。

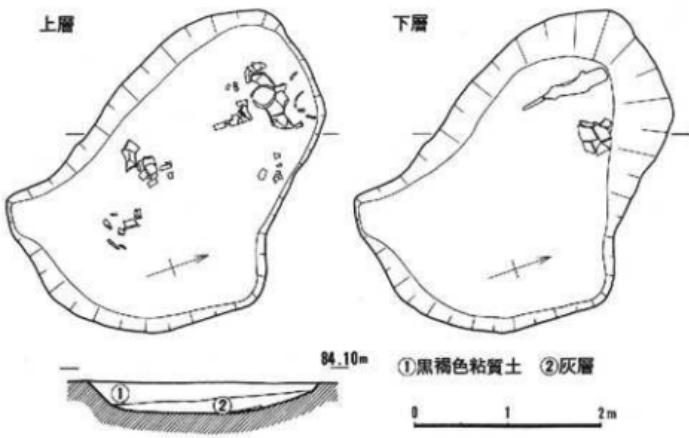
2. 遺構

（A地区的遺構） A地区では、土坑、溝、中世小溝群、ピット群などが検出された。

（1）土坑 SK1 トレンチの南端に位置する、長軸2.8m×短軸1.6mの楕円形の土坑で、深さ50cmを測るが、南端は排水溝に切断されている。土坑内から古墳時代の土師器片と手捏ね土器が1点出土した。

SK2 長軸1.4m×短軸0.8mの楕円形の土坑で、深さ20cmを測る。土坑内からは、古式土師器の破片が数点出土したのみである。

SK3 長軸1.9m×短軸1.1mの楕円形の土坑で、深さ40cmを測り、坑内の層位は大きく2層に分けられる。上層は黒褐色粘質土で、土師器の甕と底部を穿孔した須恵器の壺が出土した。下層は炭混じりの灰層で、着柄鋤の柄の一部、床面でナスピ形着柄鋤と土師器の破片が検出された。



第10図 SK 3 遺構実測図

SK 4 長軸 $1.4\text{ m} \times$ 短軸 1 m の楕円形の土坑で、深さ 20 cm を測り、土坑中央の東よりで直径約 30 cm のピットを検出した。

SK 5 長軸 $1.2\text{ m} \times$ 短軸 0.9 m の楕円形の土坑で、深さ 20 cm を測り、土坑中央より東側で直径 25 cm のピットを検出した。

SK 6 直径 0.9 m のほぼ円形の土坑で、深さ 30 cm を測る。

SK 7 長軸 $1\text{ m} \times$ 短軸 0.7 m の楕円形の土坑で、深さ 30 cm を測る。



第11図 SK 8 遺構実測図

SK 8 長軸 $0.9\text{ m} \times$ 短軸 0.8 m の円形に近い土坑で、深さ 40 cm を測る。土坑内から古墳時代の須恵器の甕、土師器片、用途不明の把手付き木製品、板材などが出土した。なお土坑内に、木棒などの施設は認められなかった。

この土坑に付属する遺構として、土坑北東隅より東に延びる溝 (SD 2) を約 25 m 検出した

が、溝はさらに調査区域外へ続いている。

(2) 溝 SD 1 調査地域内を東西に流れる溝で、溝幅は調査区東側で 1.6 m、西側で 4.6 m、深さは浅い所で約 20cm、深い所で約 30cm を測る。溝内には数点の杭があり、遺物として古墳時代中期（5世紀末）の上師器、須恵器が出土した。

SD 2 SK 8 より東へ延びる溝で、幅 30cm、深さ 20cm を測るが、溝の底の高さは SK 8 に近い西側の方が東側より低く、水は東から西に流れていたものと推定される。なお、溝内より、土師器と須恵器の小片が出土した。

SD 3 溝幅 1.8 m、深さ約 10cm で中央にむかって緩やかに落ちこむ。溝というよりも旧地表面の窪みかと思われる。

SD 4 溝幅 1 m、深さ 20cm を測り、SD 3 と同じく緩やかな落ちをなすことから、旧地表面の窪みと考えられる。

小溝群 (SD 5～SD 22) A 地区の北東部と北西部で 18 条の小溝が認められた。この小溝群の溝内からは、灰釉陶器、陶器、磁器（染付）の小片が出土しており、溝の時期については、古くても中世、新しくとも近世の所産と考えられる。また、A 地区南東部でも数条の小溝を検出したが、この部分では写真と略測にとどめて除去した。

(3) ピット群 ピットは総計 49 個確認されたが、そのうちピット 10～32 は砾層上で検出された。ピットの大きさは直徑 20～30cm 前後で、中には柱根の残っているものもあったが建物は確認できず、その機能などについては不明である。

(B 地区の造構)

(1) 溝 SD 1 溝幅 1 m、深さ 30cm を測り、埋土は茶褐色粘質土一層で土師器の小片が出土した。

SD 2 (近世溝) B 地区南端を東西に流れる溝で、幅 1 m、深さ 50～60cm を測る。溝の底面で染付が数点出土した。は場整備によって消失した旧水路であるが、江戸時代より古くなる要素はない。

(2) 土坑 (SK 1、2) SK 1 は、縦 2.3 m × 横 1 m、深さ 60cm、SK 2 は、縦 3 m × 横 1.1 m、深さ 70cm を測る長方形の土坑で、壁面はほぼ垂直に掘られている。この土坑は、規模、形状、並びの方向性などから、調査時土壤落ではないかと思われたが、SK 2 の床面よりビニール、ガラス片などが出土した。のことから遺物の検

出されなかったSK1も、相互の関連から考え現代に掘られた土壤と断定せざるをえなかった。ただ、地元にこの土坑を記憶する者がなく、機能など未解決である。

3. 遺物

(1) 土器

(遺構出土の土器) SK1 手捏ね土器(4)は、口径3.9cm、器高3.3cmで外面には黒斑、内面には粘土の継ぎ目がみられる。

SK3 須恵器の直口壺(1)は、頸部に2本の凸帯がめぐり、その間を5条の櫛横波状文でうめる。肩部は横によく張り、底部外面に叩き目がみられる。また、底部には焼成後の穿孔が認められる。土師器の甕(2)は、胸部下半を欠失している。口縁部はくの字状に外反し、端部は丸くおさめる。器体の外面は、粗いハケ調整を施すが、口縁部は横ナデでハケを消している。内面は、口縁部に粗い斜め方向のハケ調整、胸部はかき上げるようなナデ調整を施す。共に、時期は5世紀末と考えられる。

SK8 須恵器の甕(3)は、口縁が短かく外弯し、頸部には2本の鋭い凸帯がみられ、それを境として上下に10条の櫛描き波状文が認められる。胴部には、平行叩き目が施され、内面はていねいに擦り消している。5世紀末。

SD1 須恵器壺蓋(5)は、天井部が比較的平らで、全面にヘラ削りを施す。口縁端は、大きく外方へ広がり、端部は段をなす。内面は乱ナデ。5世紀末。

(包含層出土の土器)

甕には、受け口状口縁のもの(6、7)、S字状口縁のもの(8)、口縁端部内面が肥厚する布留式のもの(10、11)がある。

受け口状口縁の甕は、口縁端部が外方に開き、屈曲部に施文しない新しい段階のものであるが、(6)は肩部に7条の櫛描平行線がめぐる。庄内式の新しい時期から布留式にかけてのものであろう。S字状口縁の甕(8)は、出土地点は異なるが脚台(9)のつく伊勢湾系のもので、出土量は微量である。元尾敷期の新しい段階から石塚期に比定できよう。

壺には、口縁部外面を肥厚させ、頸部に凸帯をめぐらせたもの(12)や、二重口縁をもつ小形壺(13)などがある。(12)については、口縁に施文こそないが石塚期の壺に類似する。

鉢（15）は、口縁部が二段に屈曲する薄手のもので、体部内外面にヘラ磨きを施したもので、底部中央には、焼成後と思われる小穿孔が認められる。

（16、17）は、形態のよく似た小形壺（壙）で、平底（16）と丸底（17）がある。なお、（16）の下半分はヘラ削りしている。

高壺のうち（18）は、壺部の底がほぼ水平に拡がり、わずかに稜をもって直線的に外方向に開く口縁をもつ深いもので、外面には黒斑がある。（19）の壺底部は、わずかに内湾して稜をつくり、そこより外反する口縁部をもつ。壺内底部全面に、器底の剝離が認められる。（20）は脚部で、円形の透し孔を穿つ。外面をヘラ磨きし、内面をハケ調整する。（18、19）の脚部とは異なり、やや占い様相を示す。

特に時期を記さなかったものについては、布留式に属するものである。

第12図は、製塙土器の口縁部の小破片を復原したもので、口径約7cm、器壁は薄く1~2mmを測る。調整は、内外面ナデ仕上げで、外面は二次焼成をうけている。胎土は細密で、色調は淡灰色である。若狭地方の浜彌^⑥II A式で、5世紀後半頃に比定されている。出土は1片のみである。



第12図 製塙土器実測図

（下層出土の土器）



第13図 下層出土の土器

壺（第13図）は、口縁端部が内傾する受け口状口縁をもち、屈曲部外面と、頸部内面に粗いハケを施す。弥生時代中期・第IV様式と考えられる。

（2）木製品

針江中遺跡の調査では、木製品の出土量は少なく、柱根、杭などを除いて形状の明確なものは3点あげられるのみである。

SK3から、鋤身（1）と柄（2）を別木で作る着柄鋤が出土している。鋤身はナスピ形で、先端にU字形鉄製刃先を装着する加工がほどこされている。一部欠損するが、全長45.6cm、厚さ約1cmを測る。材質は広葉樹で、カシかと推定される。柄は弓なりにそり、鋤身に接する面は平らに加工され、紐などで縛りつけやすいように先端部にえぐりを入れ、先から約15cmのところにかえりをつけている。残存長約37cm、直徑約4cmの針葉樹の枝を使用している。

(3) は剣形木製品で、A地区南面の排水溝掘削中に出土した。包含層下部のものと思われる。剣形木製品は、両面に鋸をもち、柄頭は扁平で扇形に開く。先端部を欠失するが、現存長22.2cm、刃幅2.9cm、厚さ1cm、柄の直径1.3cm。針葉樹。

他にSK8から、用途不明木製品(4)が出土している。直径約40cmの樹木を半截し、幅9cmで斜めに切り、片端に長さ7cm、幅3cmの断面三角形の把手状のものを加工している。欠損しているが、一方の端にも同様な把手状のものがつくと思われる。針葉樹。

(3) その他

長さ1.3cm、幅0.8cmを測る不整形なヒスイの勾玉(第14図)が、包含層中から1点出土している。

第14図 勾玉



4. 小 結

針江中遺跡では、まとまりのある明確な遺構を検出することはできなかったが、数少ない遺構や遺物包含層の時期は、概ね古墳時代中期の布留式から小若江南式に限定される^⑦。

以下、今回の調査で注意をひいた遺構、遺物について二、三気付いた点を補足しておく。

(1) SK8の機能 SK8は調査時、素掘りの井戸ではないかと考えており、そこより東へ延びるSD2は、井戸の水をひく施設と理解していた。ところが、SD2の調査が進むにつれ、溝の底の高さが、SK8に近い西側の方が東側より低いことが判った。このことは、水が東から西、つまりSK8に向って流れしており、SK8は井戸ではなく、水溜めのような役割と考えざるを得なくなつた。ただ、付近一帯は地下水位も高く、針江北遺跡で検出された平安時代の井戸も深いものであることから、はたして水溜めのようなものが必要であったかどうか疑問も残る。現時点では、検出状況を考慮して水溜めとするが、今後類例の増加を待って再検討すべきであろう。

(2) ナスピ形着柄鉤の着柄 SK3より出土したナスピ形着柄鉤は、身と柄が共伴したことで注目される。柄については、すでに新旭町森浜遺跡でも出土していたが、これまでその用途については不明であった。今回、ナスピ形着柄鉤の柄の形状の一部が明らかになったことにより、各地の用途不明木製品中より柄の全様が判るもののが再

発見されるにちがいない。

さて、U字形の鉄製刃先をつけるナスピ形着柄鋤の身に対して、柄は踏み鋤のように鈍角に着柄する。身のナスピ形の先端は、柄のかえり部分、身のヘタの部分は、柄の先端と合うことから、ここを2カ所縛って身と柄を取りつける。柄のカーブについても、民俗例にみられるように自然の枝を長期間かけて曲げ、その後切り取って加工したものと考える。

ナスピ形の身のうち二股のものは、静岡県藤枝市の藤枝バイパスに伴う調査で、潮B地区より身と柄の取りつき部とが出土地^④している。ここでは、柄が身に対して鋭角につき、着柄状況から鋤ではなく鎌となることが指摘されている。おそらく「ナスピ形着柄鋤」とよばれているものについては、身の形状によって着柄も異なり、それに伴い農耕具の機能が分化されていたのだろう。



第15図 森浜遺跡出土の柄



第16図 着柄鋤・鎌の着柄状態

第6章 針江北遺跡の調査

1. 層位

調査区間は、途中農道で分断されており、調査の便宜上農道より南側をA地区、北側をB地区としたが、両地区とも基本上層は同じではば水平な堆積であった。

基本層位は、第1層・耕土、第2層・黒褐色粘質土層（遺物包含層）、第3層・青灰色粘質土層で、各層の厚さは第1層約40cm、第2層10~15cmであった。このうち第2層中には、古式土師器と平安時代の須恵器などが認められた。この第2層を除去すると、第3層の上面で遺構が検出された。

2. 遺構

（A地区的遺構） A地区では比較的まとまって、掘立柱建物、井戸、土坑、溝などの遺構が検出された。

（1）掘立柱建物 相互に関連する建物が三棟確認された。

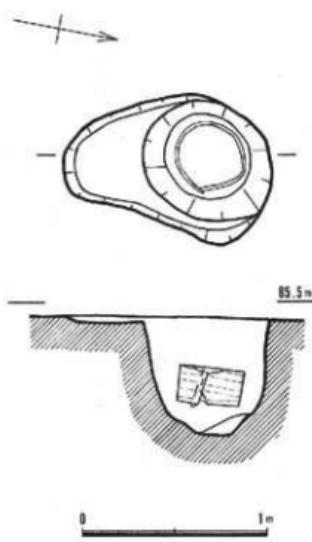
SB1 A地区北西よりにある、桁行3間×梁行2間の東西棟の建物であるが、南西隅の柱穴は排水溝で削平され確認できなかった。柱穴は、SB1~3まで全て円形で直径30~40cmを測る。

SB2 A地区北東よりにある、桁行2間×梁行1間の南北棟の建物で、井戸を伴う。

SB3 A地区的東南に位置する、東西2間×南北2間の総柱建物で倉と思われる。

（2）井戸 SE1 SB2の南側で検出されたもので、掘方の大きさは長軸1.1m、短軸0.8mを測り、掘方中央部の底面に井戸枠を使用した直径35cm、高さ25cmの曲物が1点ほぼ固定した状態で出土した。また井戸の周囲には、

4本の柱穴が確認された。



第17図 SE1 遺構実測図

(3) 土坑 SK1 長軸1.2m×短軸0.7mの楕円形の土坑で、深さ20cmを測る。

SK2 直径0.6mの円形の土坑で、深さ20cmを測る。

SK3 長軸1.4m×短軸0.9mの楕円形の土坑で、深さ25cmを測る。

SK4 長軸1m×短軸0.6mの楕円形の土坑で、深さ25cmを測る。

SK5 長軸1.9m×短軸75cmの楕円形の土坑で、深さ20cmを測る。

SK6 長軸0.8m×短軸45cmの楕円形の土坑で、深さ30cmを測る。

SK7 長軸1.4m×短軸0.8mの楕円形の土坑で、深さ30cmを測る。

SK8 長軸1.1m×短軸0.6mの楕円形の土坑で、深さ30cmを測る。

SK9 直径約1mの円形の土坑で、深さ50cmを測る。土坑の東端は側溝で削平されている。

SK10 S E 1の西側に位置する直径約1.4m、深さ50cmのはば円形の土坑で、底部から須恵器の坏身と底板のある直径約20cmの曲物が横転した状態で出土した。また、土坑の底部で、薄く敷かれたような砂礫層を観察した。

SK11 S B 3の南西に位置する直径約1.4m、深さ90cmのはば円形の土坑で、土坑内からは須恵器の坏身と板材1点が出土した。

(4) 溝 小溝群 (SD1~16) 針江中遺跡で検出されたのと同じ小溝群が、A地区の北側に集中して認められた。遺物は、溝内から中世の土師器や陶器の小片が出土した。

SD17 S B 3の西側に位置し、北西方向に伸びる溝状の遺構で、長さ約2.3m検出した。溝幅は70cm、深さ20~50cmを測る。溝内からは、平安時代前期(9世紀末)の須恵器の坏蓋、坏身、皿、土師器の坏、北陸系の小型甕などの比較的まとまった破片が10数点出土した(図版19・下)。

SD18 A地区の西北端に位置し、東西方向に伸びる溝で約10m検出した。溝幅は約6m、深さ40~50cmを測り、溝内の堆積は黒褐色粘質土一層であったが、遺物は古式土師器や木製品が多量に出土した。

自然流路 S B 1とS B 2の間を東西に流れる溝で、溝幅130~280cmを測る。溝内の堆積は、茶灰色砂利層の単層で、遺物は1点も出土しなかった。このことより考えて、この溝は、針江北遺跡形成前の自然流路かと思われる。

(5) 橋 (SA1) S B 1の南側に並ぶ5つのピットを確認した。ピットは円形で

直径約40cmを測り、ピットの間隔は東より70cm-80cm-70cm-80cmである。

(6) ピット群 A地区のトレンチ中央から北西部、南西部にピットが認められるが、それぞれ群をなすだけで遺構としてはとらえられなかった。

(7) 落込み (SX1、2) S B 1とSD18の間と、A地区北東端で、土器片を包含した落込みを検出したが、検出状況からみて、旧地表面の窪地と思われる。

(B地区の遺構) B地区では、第2層の遺物包含層がほとんどなくなり、遺物もわずかしか出土しない。層位も、耕土を除去するとすぐに砂礫層となり、その上面で遺構が確認された。

(1) 土坑 (SK1~4) 各土坑とも同様なほぼ円形の土坑で、遺物は無く、時期、性格など不明である。

(2) ピット群 B地区中央部より南に、直径30~50cmのピットが点在するが、現状では建物とは考えがたい。試掘トレンチ32で検出されたピットは、これらに該当する。

(3) 溝 SD1 トレンチを横切って東流する溝で、最大幅5m、最小幅2.2mを測る。この溝は、は堀整備によって消失した旧水路であるが、出土遺物などからみて江戸時代より古くなる要素はない。

3. 遺 物

(1) 土 器

SD18 溝内から、弥生時代末から古墳時代初頭の時期と考えられる土器が多量に出土した。

壺には、受け口状口縁のもの(1、2)と口縁部外面に擬回線をもつもの(4)、頸部から口縁部にかけて緩く内傾しながら上方へ立上るもの(3)などがある。(1)は、口縁部外面に刺突列点文、頸部に櫛描平行線文を施す。(2)は、屈曲部と肩部に刻み目をもつ。(3)は、体部外面と口縁部内面下半をハケ調整する。(4)は北陸系の壺で、口縁部に7条の擬回線を施し、外面はハケ、内面は板状具によるナデ調整。

壺は口縁部がくの字状に外反するもの(5、6)、外上方へ伸びるもの(7)、二重口縁のもの(8)、比較的頸部が長く口縁端部を外方につまみ上るもの(9)や、

口縁部を装飾するもの（10、11）がある。（5）は、器体にハケ目痕が残り、（6）は、口縁端部外面にハケを施し、頸部には刻み目をめぐらす。（7）は、口縁部内面に横ハケを施す。（10、11）は、伊勢湾系のパレススタイルの壺である。（10）は、口縁帶外面に円形浮文と3本一単位の刻み目を入れた棒状浮文を配し、内外面ともヘラ磨きしている。（11）は、口縁部が垂下し、その外面に櫛櫛波状文を施し、刻み目を入れた3本一組の棒状浮文をつける。頸部には、刻み目を入れた凸蒂がめぐる。

（12、13）は、直立気味の短い口縁部をもつ小型壺で、内外面ハケ調整を施す。（12、13）とも外面に煤の付着がみられる。

高环は、数種類認められるが、椀状の坏部（15）と脚部（16、17）を図示する。（16）は三方に円孔を穿つもので、（17）は脚部据部に稜をもち、稜部に刺突文がめぐり、内外面ともヘラ磨きを施し、据部中央に円孔を穿っている。

器台（14）は、外方へ大きく開く口縁部をもち、口縁端部外面に竹管文を施した円形浮文を配する。

瓶（18）は、平底に近い底部からほぼ直線的に開く鉢形のもので、底部に一孔を穿つ。外面はハケ、内面はナデ調整である。

S K10、S K11、S D17は、遺構の関連からみて同時期のもので、高島郡高島町鶴遺跡の貞觀15年（873）銘木筒を伴出したトレンチ10の包含層の土器と共通することから、平安時代前期の9世紀末～10世紀初頭頃のものと考えられる。

SD17 溝内から、須恵器坏身（21、22）、坏蓋（23）、皿（24）、土師器坏（25、26）、甕などが出土した。須恵器坏身には、高台をもつもの（21）ともたないもの（22）がある。高台をもつ坏身も、S K10（19）やS K11（20）とくらべると、高台の形や位置など細部に差違がみられる。坏蓋（23）は、天井部に宝珠つまみをもつものである。土師器坏（25、26）は、つくり、胎土の良いもので、甕は底部のみであるが、平底で静止糸切り痕を残す北陸系の小甕である。

（2）木製品

数十点の木製品や加工木などが出土しているが、そのほとんどはS D18からである。このうち形状の明らかなものとしては、S D18からは石庖丁形木製品、火鑓臼、籠、槽、有頭棒、鍬の未製品、S E 1、S K10から曲物各1点が出土している。

石包丁形木製品（第18図）は、両端が欠損しているが、かなり完形に近いものではないかと推定される。長辺に刃部をもち、片面に櫛を彫り二孔を穿つ。刃部は片刃で、木目が刃部に対して斜め方向になるよう木取りされている。現存長14.2cm、現存幅7.2cm、厚さ1.6cm。広葉樹（コナラか？）。

火鑓臼（6）は、欠損しているが3個の臼があり、うち1個は未使用である。なお、使用した臼の底の窪みは、U字型であった。現存長16.5cm、幅1.9cm、厚さ1.2cm。針葉樹。

箒（7）は、柄の先端が一部欠損しているが、先端に使用による片減りがみられる。現存長22.8cm。身は幅3.2cm、厚さ0.8cm、断面半円形を呈する。柄は幅1.7cm、厚さ0.8cm。針葉樹。

槽（8）は、方形の容器であるが大部分欠損している。現存長36.5cm、現存幅13.7cm、厚さ2.4cm。針葉樹。

有頭棒（9）は、細い棒の先端部を紡錘形に削出したもので、棒の下半を欠失する。全体にていねいな削り整形を施す。現存長43.9cm、最大径2.0cm、端部径1.1cm。針葉樹。

獣の未製品（10）は、欠損しているが、側縁は直線状で単純に開き、平面形が揆形をした広歛になるものと思われる。舟形突起は逆三角形を呈する。現存長34.3cm、現存幅17.7cm、頭部厚さ3.9cm。広葉樹（カシか？）。

曲物（11）は、S E 1の井戸棒として使用されていたため、底板がはずされている。棒皮は幅5mmで、4箇所に縫い目を入れ、中程は2列にしてある。側板の内面全体に粗い刻線があるが、接合部分は特に念入りに刻んである。木釘孔は3箇所残っており、復原すると全体で14箇所とめてあったと推定できる。外径37cm、高さ40cm、厚さ0.5cm。

曲物（12）は、SK10より出土した完形品である。柾目板の底板に、棒皮で縫った側板を木釘で固定する。棒皮幅は8~9mmで、上段の縫い目に端を折込み、上方にまわして一旦下まで縫ってから再び上へもどり、下段の縫い目に端を差込んで終る。木釘は4箇所で打込むが、上部にも木釘孔がみられる。側板の内面全体に粗い刻線がみられる。外径17.3cm、高さ10.3cm、側板の厚さ0.4cm、底板の厚さ0.8cm。

4. 小 結

(1) SD18出土土器の年代をめぐって SD18出土の土器については、溝内の堆積が単層で、他に重複する遺構もなく、比較的時間幅の短い遺物群としてとらえられる。SD18の土器は、甕、壺、高坏、器台とセット構成するが、とりわけある器形が減少するといったような傾向はあらわれていない。しかし、甕が口縁部外面に刺突列点文を施す受口状口縁の甕だけでなく、同じ受口状口縁の甕でありながら装飾に変化がみられたり、高坏の種類に変化がある。

近江の第V様式の一つの指標となつた野洲郡野洲町久野部遺跡の土器を、仮に久野部式としてとらえた場合、湖西地方（高島郡内）においても同型式は新旭町熊野本遺跡^⑪や針江遺跡、今津町弘川遺跡などで認められる。久野部式にみられる典型的な第V様式のセットと、SD18の土器を比較すると、SD18に種々後出的要素が見出せる。

まず壺についてみると、長頸壺およびその系譜を引く直口壺がみられず、同じく口縁を垂下させた壺が含まれていない。SD18でみられる壺は、くの字状口縁をもつがシャープさがなく、器面の調整も粗く、全体に簡略化がめだつ。

甕は、すでに述べたようにバラエティが認められるが、刺突列点文を施す受口状口縁の甕についても、第V様式の典型的なものが直立部全体に施していたのに対し、SD18のものは屈曲部にある。この屈曲部への施文の変化したものが、刻み目文となるのであろう。こうした傾向が、近江の他地域においても認められるかどうか検討の要がある。湖西地方では、第V様式から庄内、布留式への受口状口縁の甕の変化を、從来言っていたように、刺突列点文 → 沈線・棒状浮文 → 無文化といった変化とはやや異なるようである。このように考えると、刺突列点文が庄内式の段階まで残ることや、沈線や棒状浮文を施した甕が少ないことも理解できよう。

器台も、第V様式にみられる筒状のものではなく、受け部が脚部上方から大きく外方に開く新しい様相のものである。

このように、基本的には第V様式の諸要素を残してはいるものの、碗状の坏部をもつ高坏や、二重口縁の甕が加わるなどこれまでなかった器形がみられる。こうしたSD18の土器は、湖西地方における第V様式末の時期から、新旭町森浜遺跡にみられる畿内型の庄内式土器の甕を含む土器のセットが伝播するまでの位置を占めていたと考えられる。

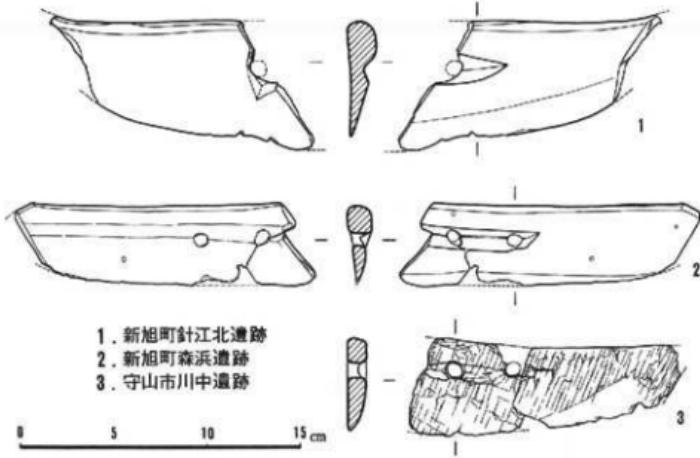
搬入品については、北陸系の壺がみられ谷内尾普司氏の編年案による法仏I式、伊勢湾系の壺については欠山式の新しい時期のものと理解している。^⑯

S D18については現在整理作業を継続しており、現段階における一つの予察をのべたが、近い将来より具体的に編年、他地域との併行関係を明らかにすることができよう。

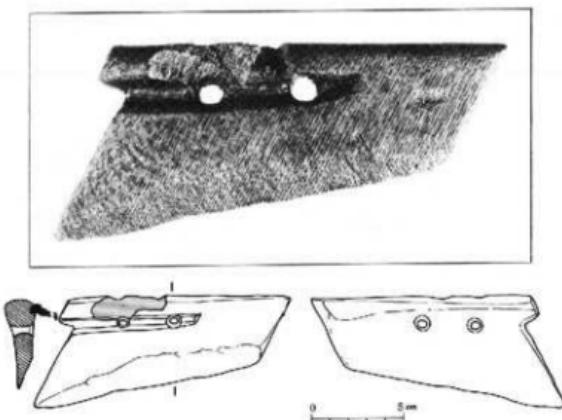
(2) 石庖丁形木製品 S D18出土の木製品中、特異な形状をする遺物として石庖丁形木製品がある。この機会に、これまで県下で出土したものを集成し、二、三気付いた点をのべておく。

石庖丁形、庖丁形木製品、木庖丁と仮称されている木製品は、奈良県宇陀郡椿原町高塚遺跡、桜井市轟向遺跡、磯城郡田原本町唐古遺跡、大阪府東大阪市巨摩庵寺遺跡、同市鬼虎川遺跡、同市若江北遺跡、八尾市龜井遺跡、兵庫県伊丹市原田遺跡、姫路市八反町遺跡、滋賀県高島郡新旭町森浜遺跡、同町針江北遺跡、守山市川中遺跡、石川県羽咋市吉崎・次場遺跡などで20例以上出土している。その形状は、多少の相違はあるが次の点ではほぼ共通する。

- ① 両端を斜めに切った、平行四辺形の板状をなす。
- ② 片面の上部に、上辺に平行して樋を彫り二孔を穿つ。^⑰



第18図 県下出土の石庖丁形木製品



第19図 石川県羽咋市吉崎・次場遺跡出土例

く、また、樋も中央より左よりである。

時期的には、巨摩廃寺遺跡例の弥生時代中期より、古墳時代前期まで認められる。

本県出土例は、3例とも古墳時代前期である。川中遺跡例は表面が焼けこげており、左端がこれで終るのか、あるいは断面形状が裏面が表面側にもう少し弯曲するのか、今一つ決めがたいが、森浜遺跡例に近い。森浜遺跡例は、右端をやや欠くがほぼ完形で、左辺の形状は、一見鐵のカエリのような形をしており、石川県吉崎・次場遺跡例と共に通する。針江北遺跡例は、森浜や川中遺跡例よりも大きく、上、下辺のカーブから奈良県高塚遺跡例のような翼状をした形態になるかもしれない。

本県3例を観察して気づいたことは、断面形状が裏面が表面側に弯曲し、極端に表現すると二枚貝片側のカラの断面を思わせる。ただし、このカーブは実測図では誇張しないと出ない。また、刃の部分は全て摩滅（歯こぼれ）が認められるが、孔については石庖丁にみられる紐ズレの跡は認められなかった。このことは、報告に写真のある大阪府巨摩廃寺遺跡、奈良県櫛向遺跡、唐古遺跡、石川県吉崎・次場遺跡例でも同様である。このように細部を検討すると、形態、断面形、紐ズレの問題など石庖丁と異なる点も多い。形状、二孔、刃部など外見状の類似をもって、本木製品を石庖丁と同機能、あるいは石庖丁の仮器とすることは早計であろう。

(3) 平安時代の遺構 針江北遺跡でSD18を除いて明確な遺構は、掘立柱建物 (S

③ 片面の下辺に刃をつける。刃には使用によると思われる摩滅がある。

④ 木目は上辺に對して、直角よりもやや斜め方向に走る。

樋のある面を表とした場合、總体的に向って左側の辺は右の辺より長

B 1～3）、井戸（S E 1）、土坑（S K 10、11）、溝（S D 17）で、相互の関連から平安時代前期（9世紀末～10世紀初頭）の時期が考えられる。建物の配置からみて、3棟の建物は S B 1 を主屋、やや規模の小さい S B 2 を副屋、S B 3 を倉とし、それに井戸が附属して1戸の家を構成している。土坑や溝は、それに関連して何らかの機能を有していたのであろう。こうした3～4棟の建物からなる家が何戸か寄って集落を構成したことは想像に難くないが、各遺構に伴う遺物がそう時期幅をもっていないことから、この地点での生活期間はそう長いものではなかったようだ。弥生時代以来、針江周辺の低湿地の開発はたびたび行われたようであるが、平安時代前期の集落跡からみて、おそらくこの時期に条里制にのった低地の大規模な再開発がなされたのではないだろうか。かって水路工事の断面観察で埋没畦畔が発見された深溝条里遺跡では、畦畔に伴って S D 17出土例と同じ土師器環が出土しており、集落と水田の関係がうかがえる。

＜註＞

- ① 国司高志・兼康保明『針江遺跡群試掘調査概要』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和56年）
- ② 兼康保明・国司高志・宮崎幹也・尾崎好則『正伝寺南遺跡・新庄城遺跡試掘調査概要』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和57年）
- ③ 兼康保明・宮崎幹也『針江遺跡群施遺跡発掘調査概要』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和57年）
- ④ 『高島郡誌』（高島郡教育会、昭和2年）
- ⑤ 年代については二説ある。一つは、蓮弁のあり方や裏面の製作技法などから白鳳時代まで遡るとするものである。今一つは、中房の作りなどから奈良時代末期頃とするものであり、今回の出土状況からは年代の判定は難しく、今後の検討に待ちたい。
- ⑥ 大參義一「弥生式土器から土師器へ——東海地方西部の場合——」（『名古屋大学文学部研究論集（史学）』第47期、昭和43年）
- ⑦ 森浩一・石部正志・堀田啓一・白石太一郎・大野左千夫「福井県田烏鴨における古代漁業遺跡調査報告」（『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告第4冊、昭和46年）
- ⑧ 岛井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』（岡山県高島遺跡調査委員会、昭和31年）

- ⑧ 「国道1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査概要」昭和52年度（静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会、昭和53年）
- ⑨ 丸山竜平・兼康保明・岡本隆子ほか「鴨遺跡」（高島町歴史民俗叢書第2輯、高島町教育委員会、昭和55年）
- ⑩ 兼康保明「久野部遺跡発掘調査報告書」（野洲町教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和52年）
大橋信介・別所健二・谷口徹「久野部遺跡発掘調査報告書 — 七ノ坪地区 — 」（滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和52年）
- ⑪ 「熊野本遺跡分布調査報告書」（滋賀県教育委員会、昭和43年）
- ⑫ 国司高志・神谷友和「高島郡新旭町針江遺跡」（「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」Ⅶ-1、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和55年）
- ⑬ 山口順子・兼康保明「高島郡今津町弘川遺跡」（「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」Ⅶ-3、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和56年）
- ⑭ 本田修平・堀内宏司・奥野宗寛・折井千枝子「滋賀県下の庄内式土器 — 織内より収入された變形土器の分布 — 」（『滋賀文化財だより』9、滋賀県文化財保護協会、昭和52年）
- ⑮ 石川県の編年については、石川県立埋蔵文化財センター谷内尾吉氏の御教示による。
- ⑯ 出土地一覧は、「巨摩・瓜生堂」のデータに追加したもの。
- 石野博信「大和の弥生時代」（『櫛原考古学研究所紀要 考古学論叢』第2冊、奈良県橿原考古学研究所、昭和48年）
石野博信・関川尚功ほか「難向」（桜井市教育委員会、昭和51年）
- 久野邦雄・寺沢薰「昭和52年度 唐古・鏡遺跡発掘調査概要」（田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、昭和53年）
- 堀江門也・玉井功・小野久隆・井藤曉子「巨摩・瓜生堂」（大阪府教育委員会・大阪文化財センター、昭和56年）
『鬼虎川遺跡出土遺物にみる弥生人のくらし』（東大阪市立郷土博物館、昭和58年）
『川中遺跡発掘調査概要』（守山市教育委員会・守山市遺跡調査団、昭和47年）
- 福島正実「羽咋市吉崎・次場遺跡」（『石川県立埋蔵文化財センター所報』第11号、石川県立埋蔵文化財センター、昭和58年）第19図は『所報第11号』より転載。
- ⑰ 東大阪市鬼虎川遺跡出土例には、柄の無いものもある。
- ⑲ 福岡澄男ほか「国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書」（滋賀県教育委員会、昭和46年）



調査開始時の状況（南東より）



第12 トレンチ調査状況（南西より）



第7 トレンチ堀全景（西より）



第9 トレンチ石列全景（北西より）



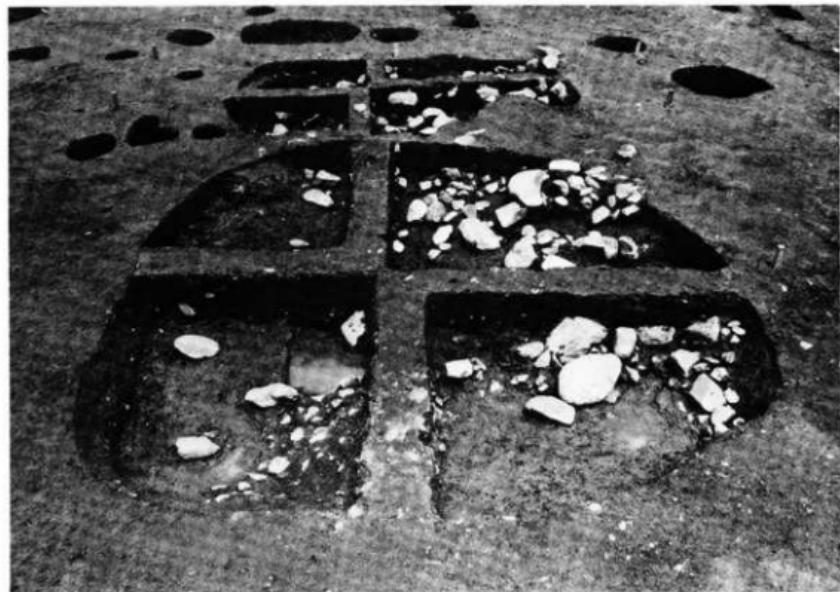
第12トレンチ土堤状遺構（北西より）



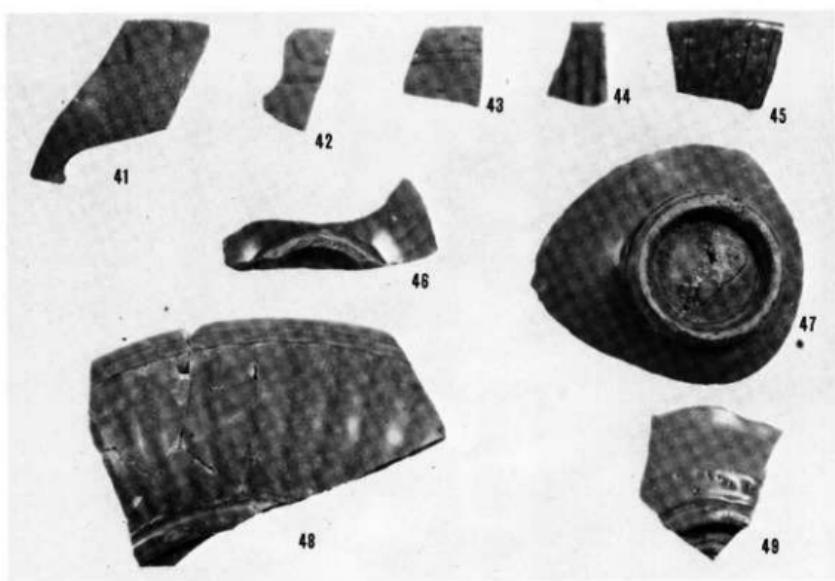
第15トレンチ石敷遺構（南より）



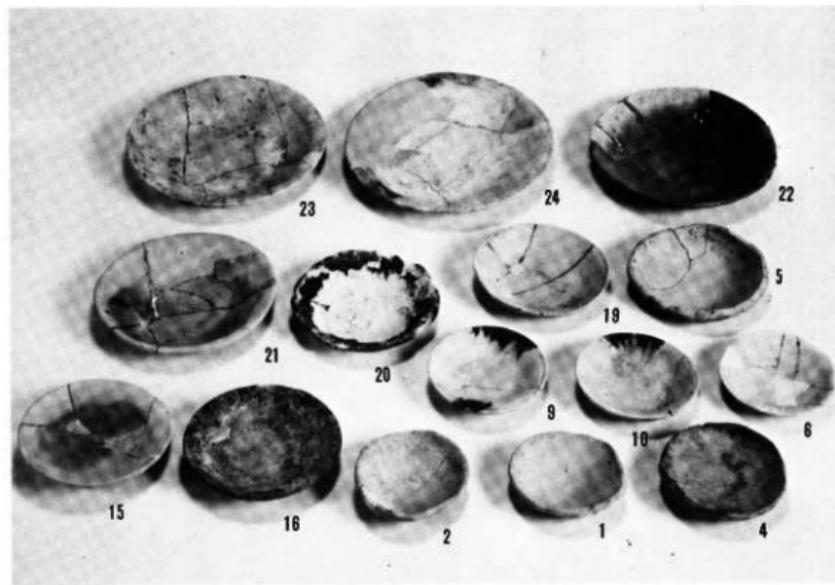
第12トレンチ S E 1



第12トレンチ S K 1

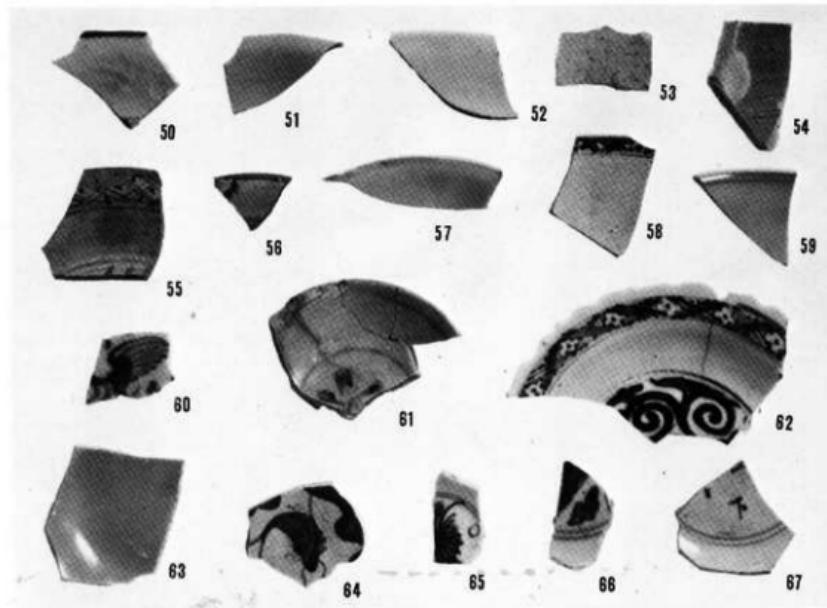
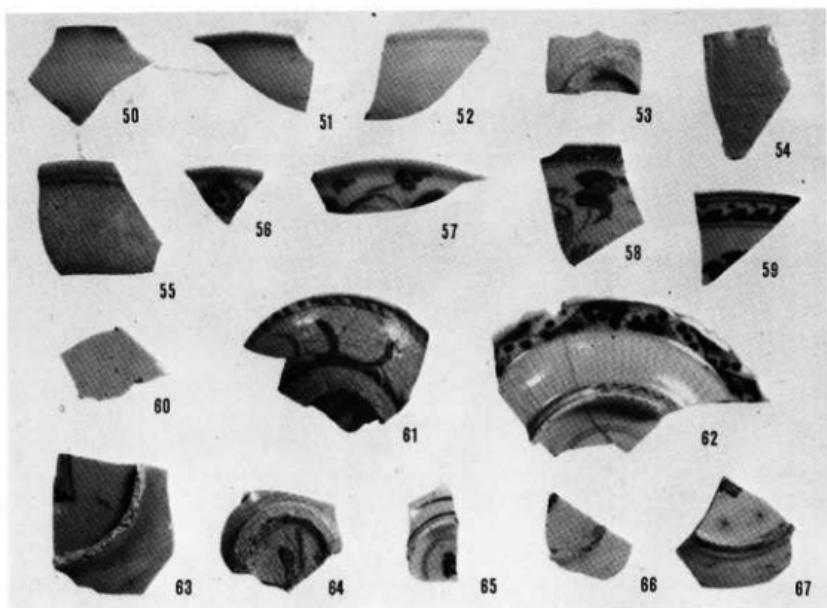


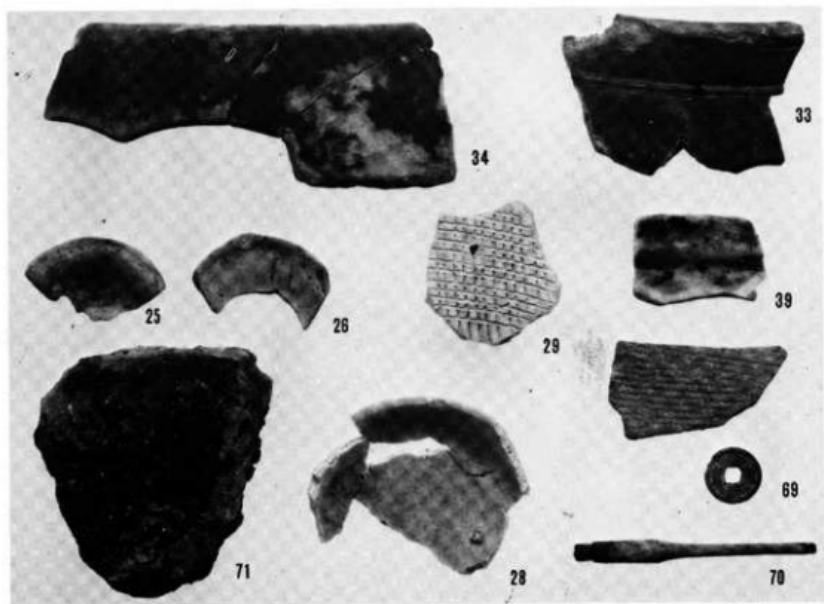
輸入磁器

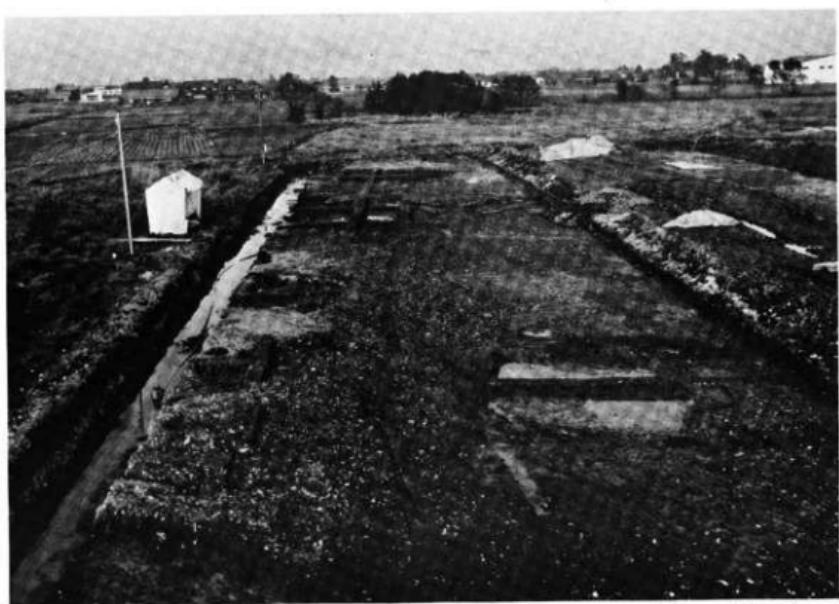


土師質土器・皿

圖版六 新庄城遺跡・遺物(輸入磁器)



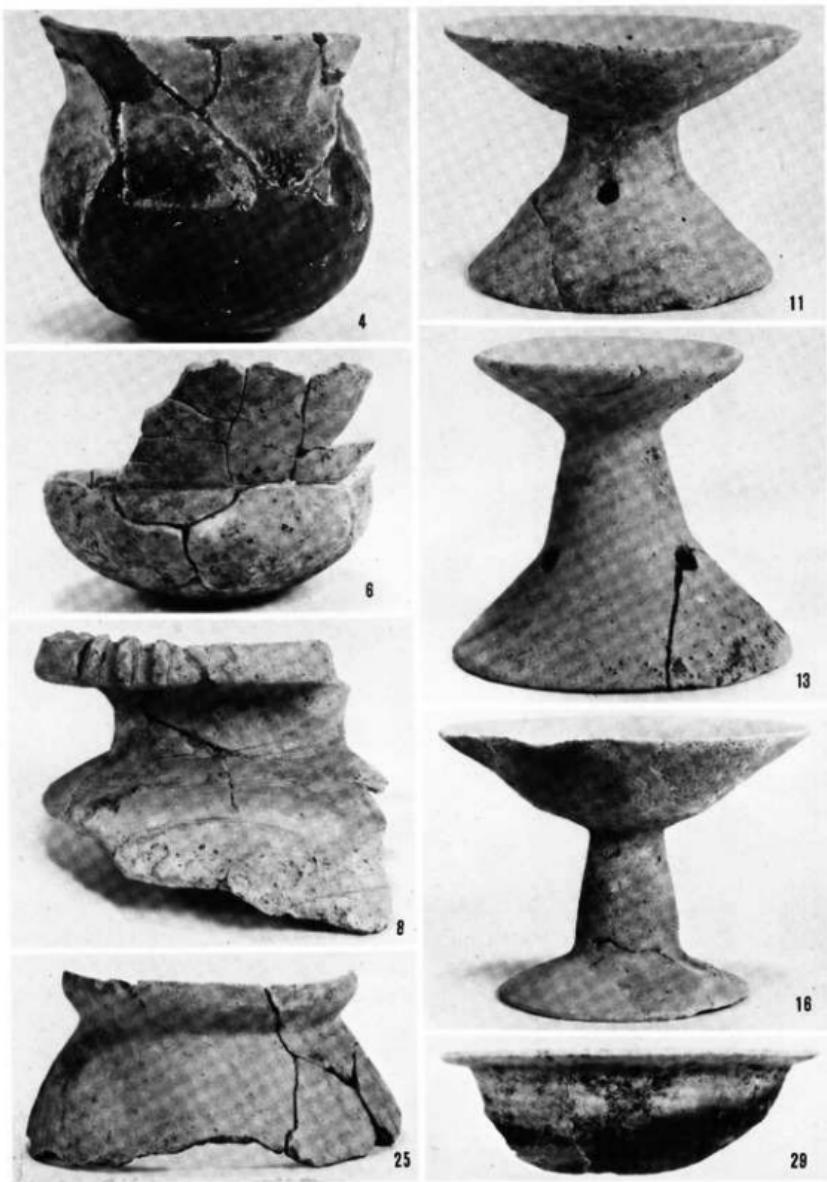


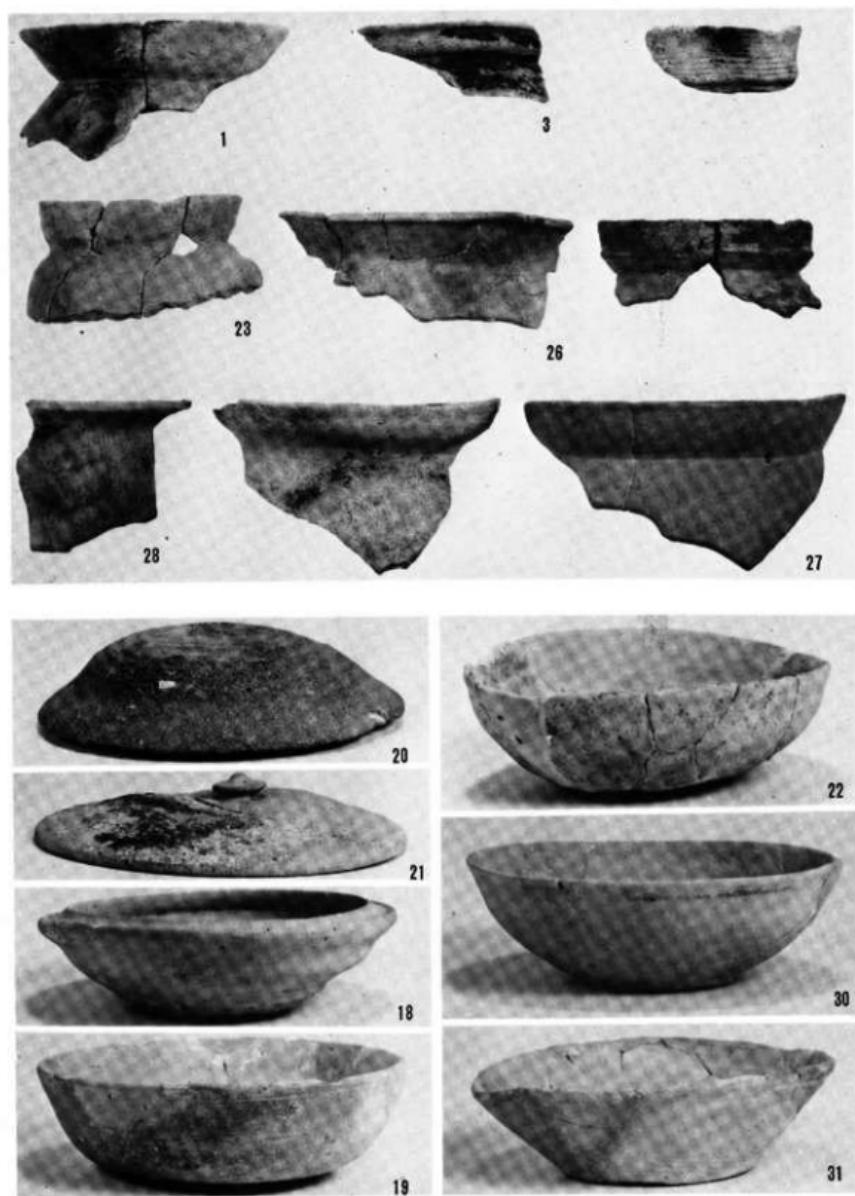


西トレンチ全景（南より）



東トレンチ全景（南より）



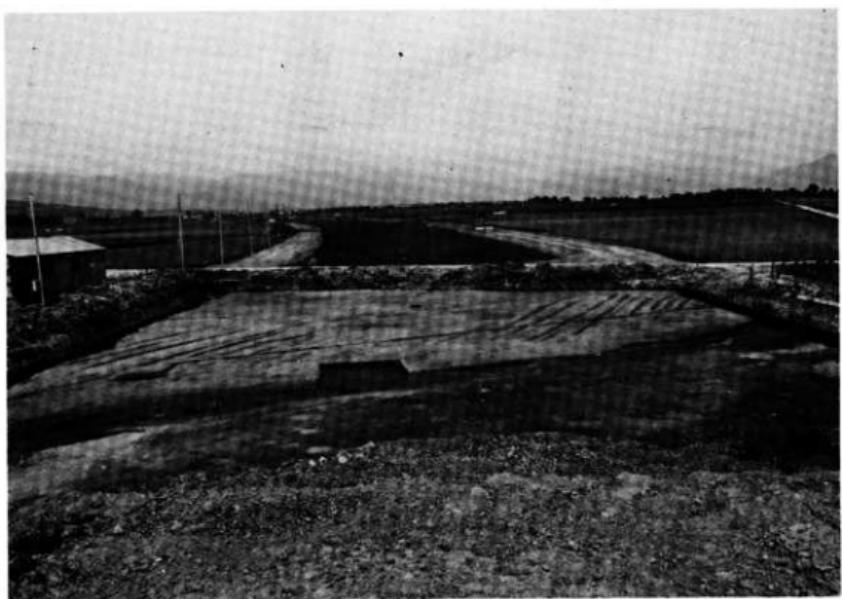




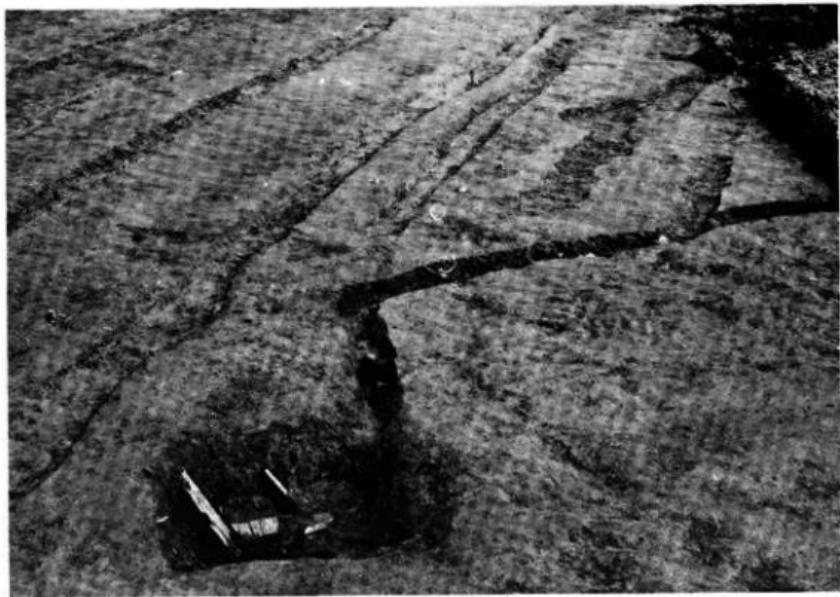
A地区南半部（北より）



S K 3 着柄鏡出土状況

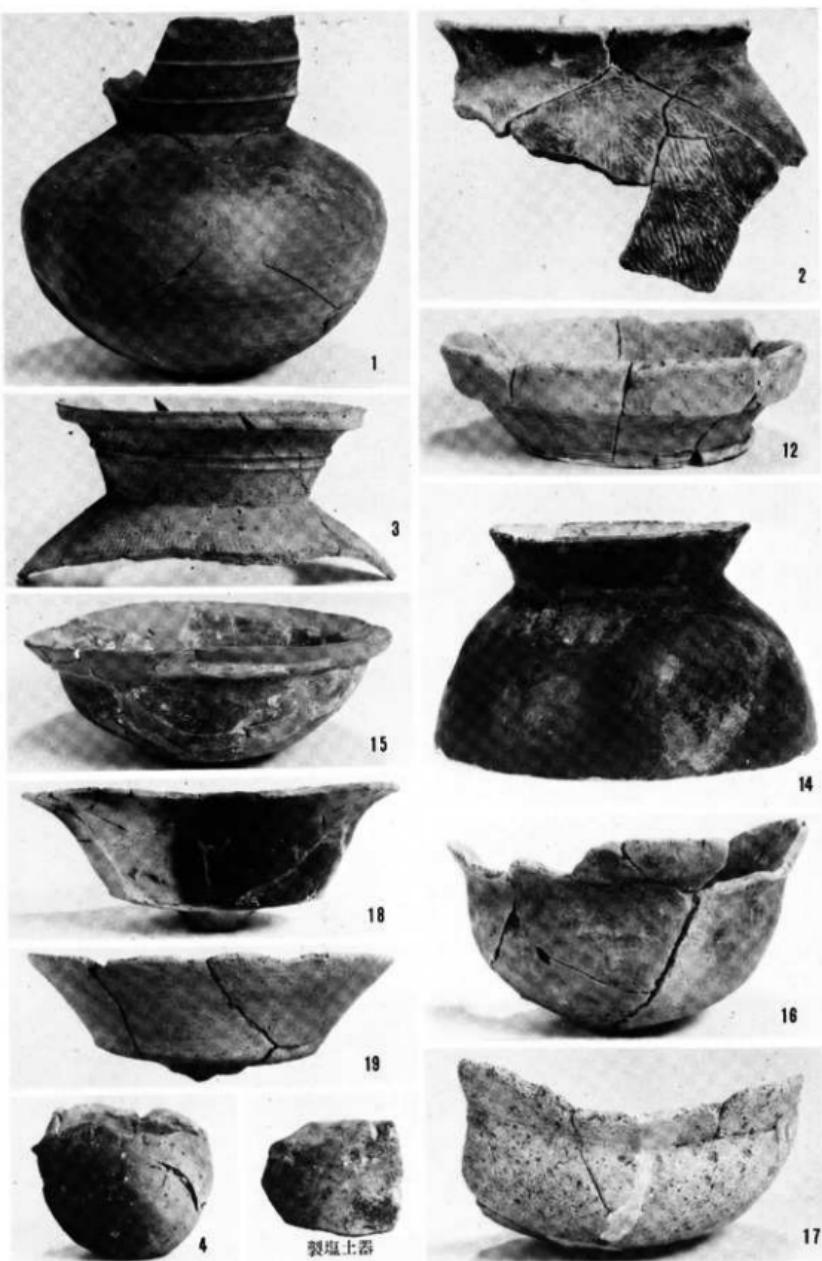


A地区北半部（南より）



S K 8・S D 2 遺物出土状況（南より）

圖版一三 针江中遺跡・遺物





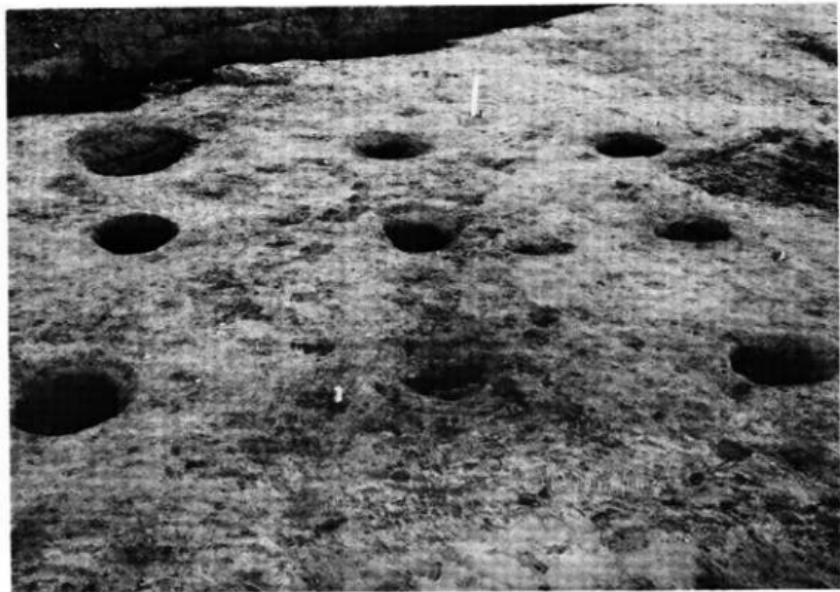
A地区全景（南より）



B地区全景（南より）

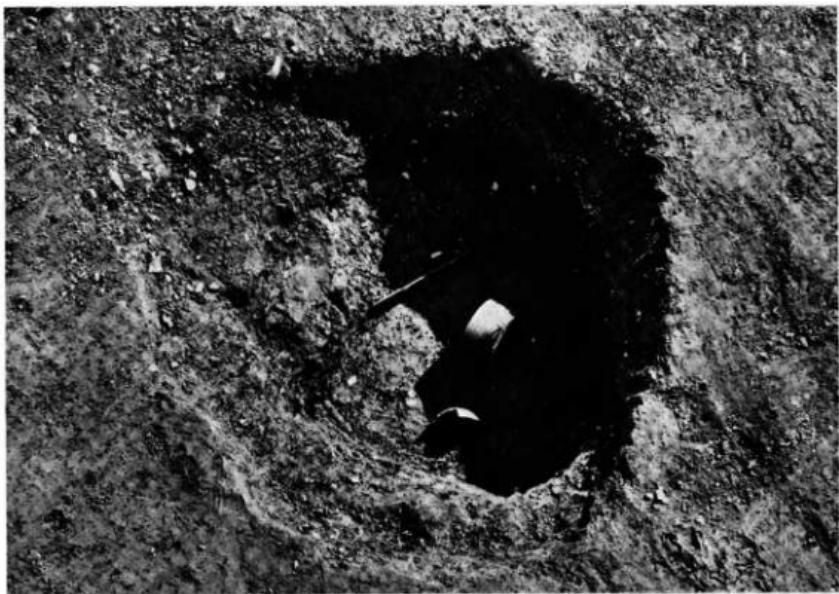


S B 2 (西より)



S B 3 (西より)

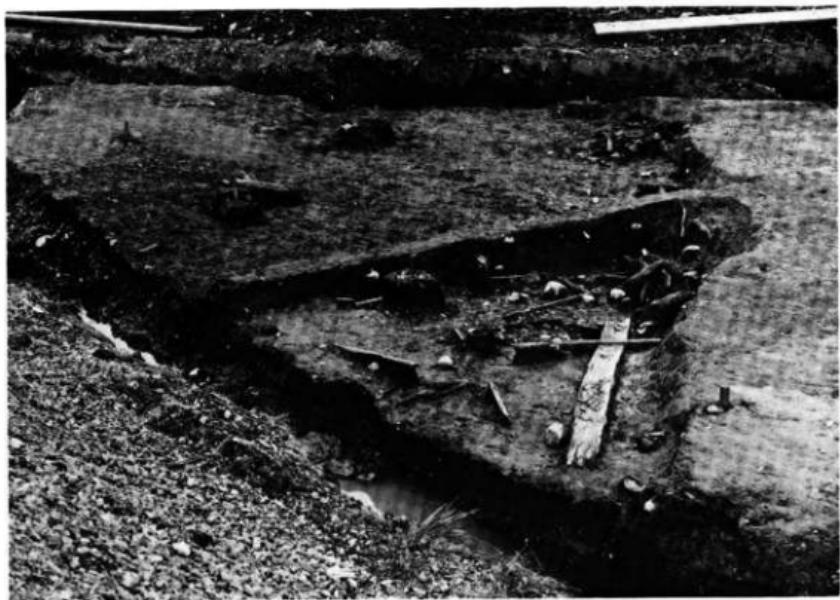
圖版一六 针江北遺跡・遺構



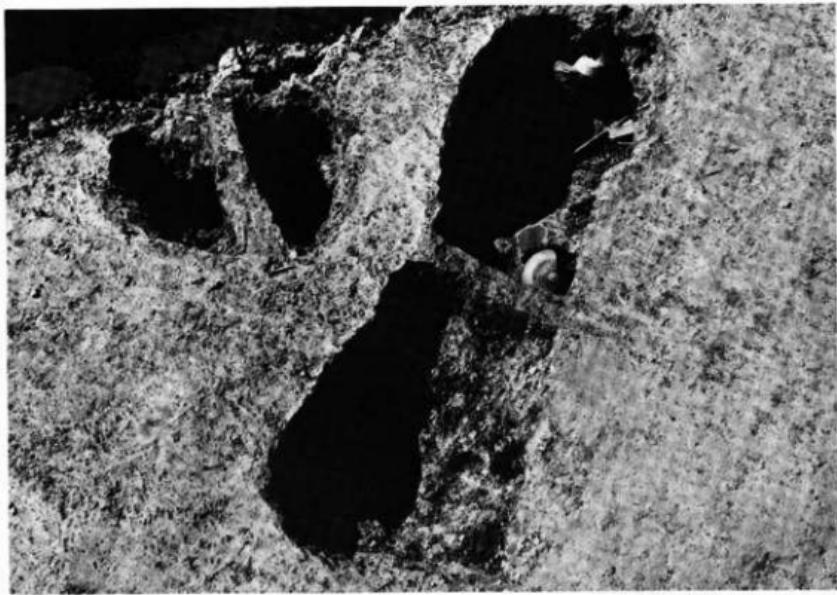
SK 10 遺物出土状況



SE 1 曲物出土状況

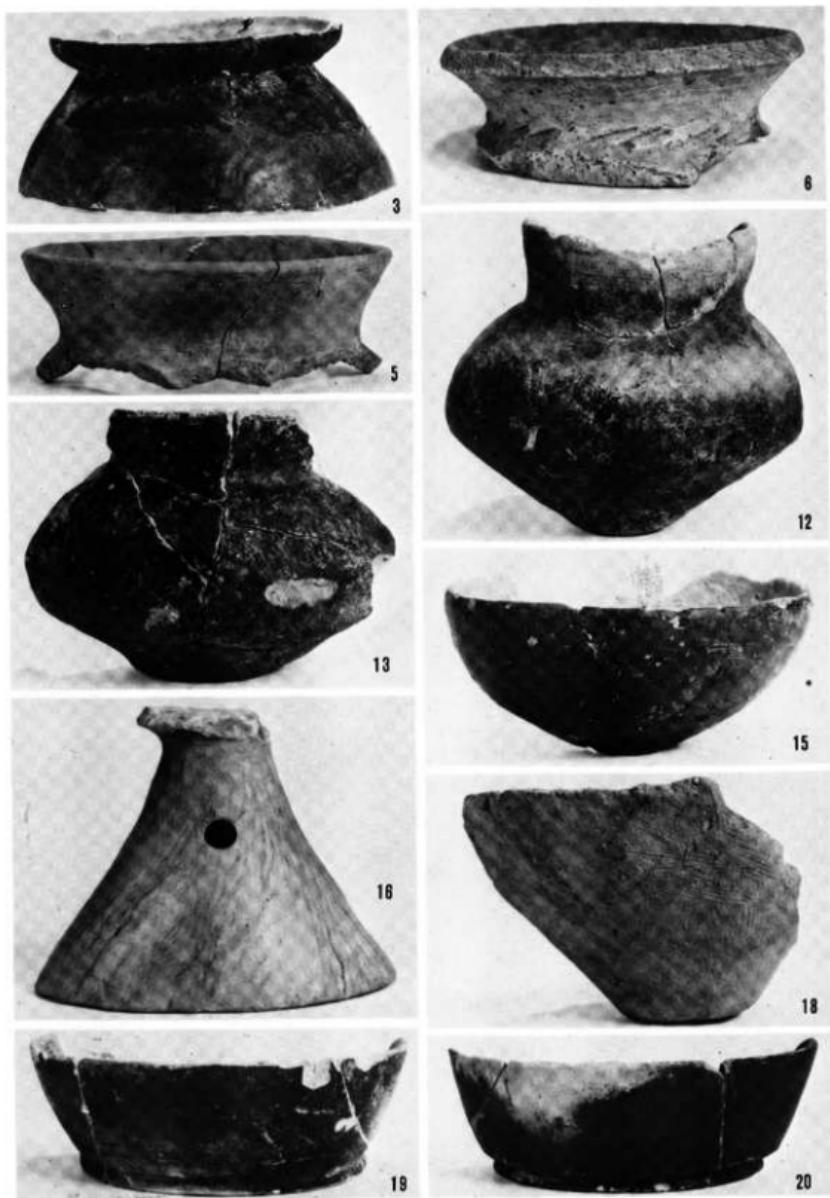


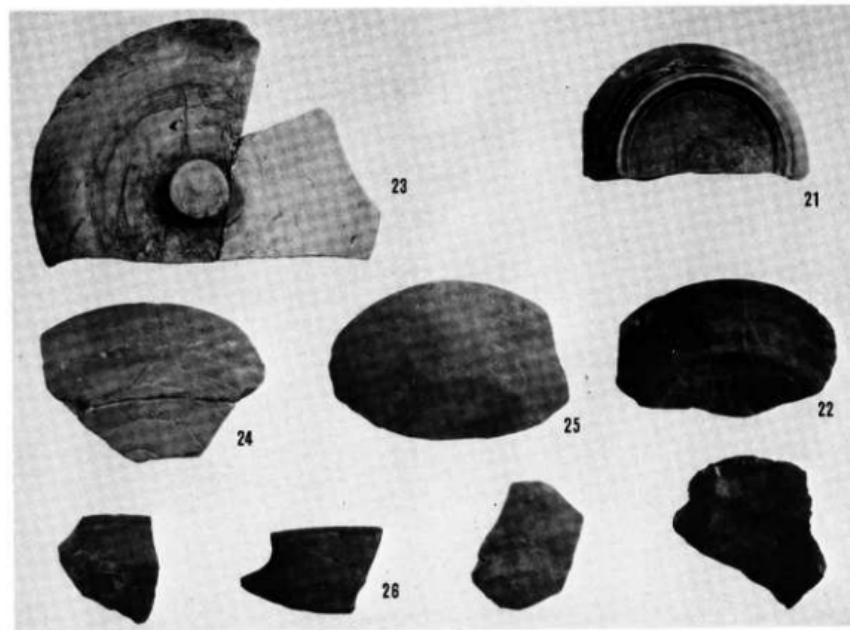
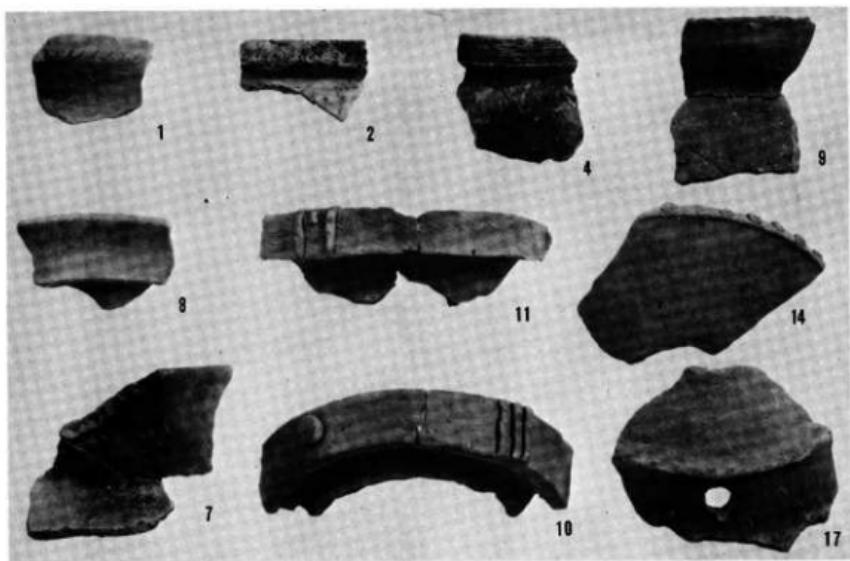
S D 18 遺物出土状況（南より）



S D 17 遺物出土状況（西より）

圖版一八
針江北遺跡・遺物





S D17出土土器

圖版二十 針江中遺跡·着柄劍

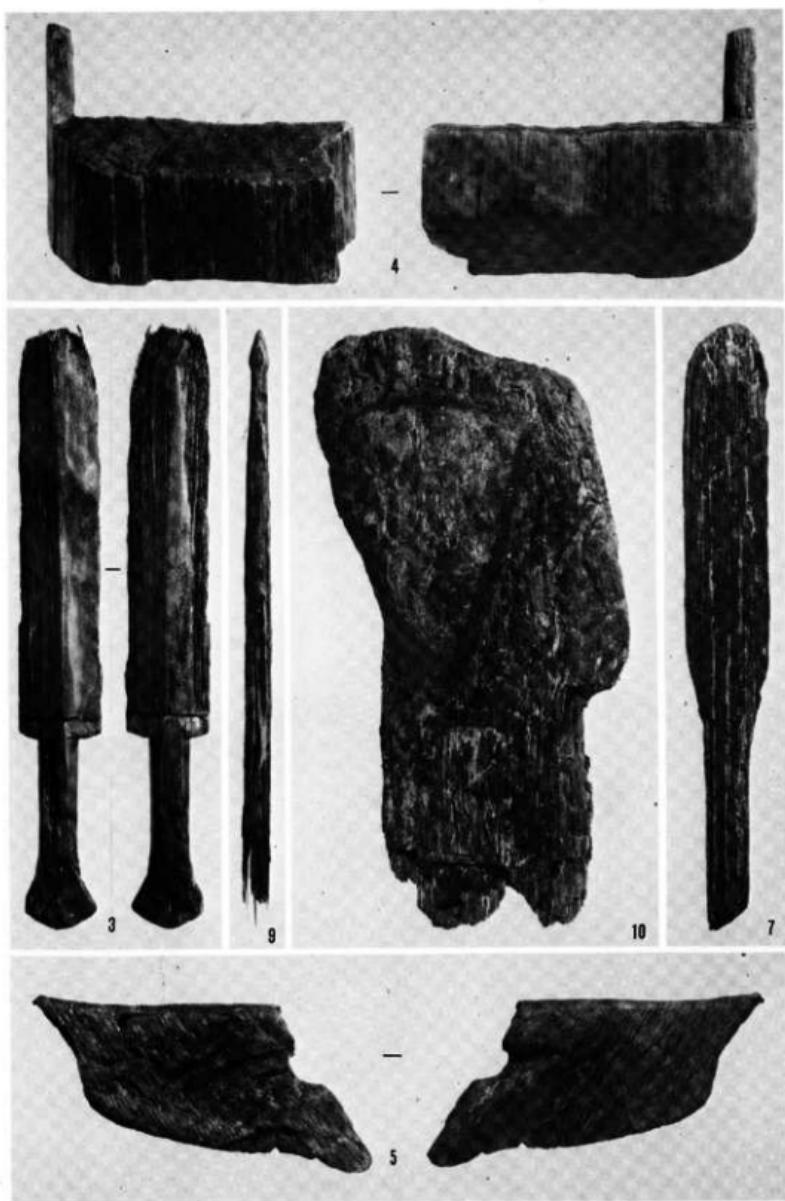


1

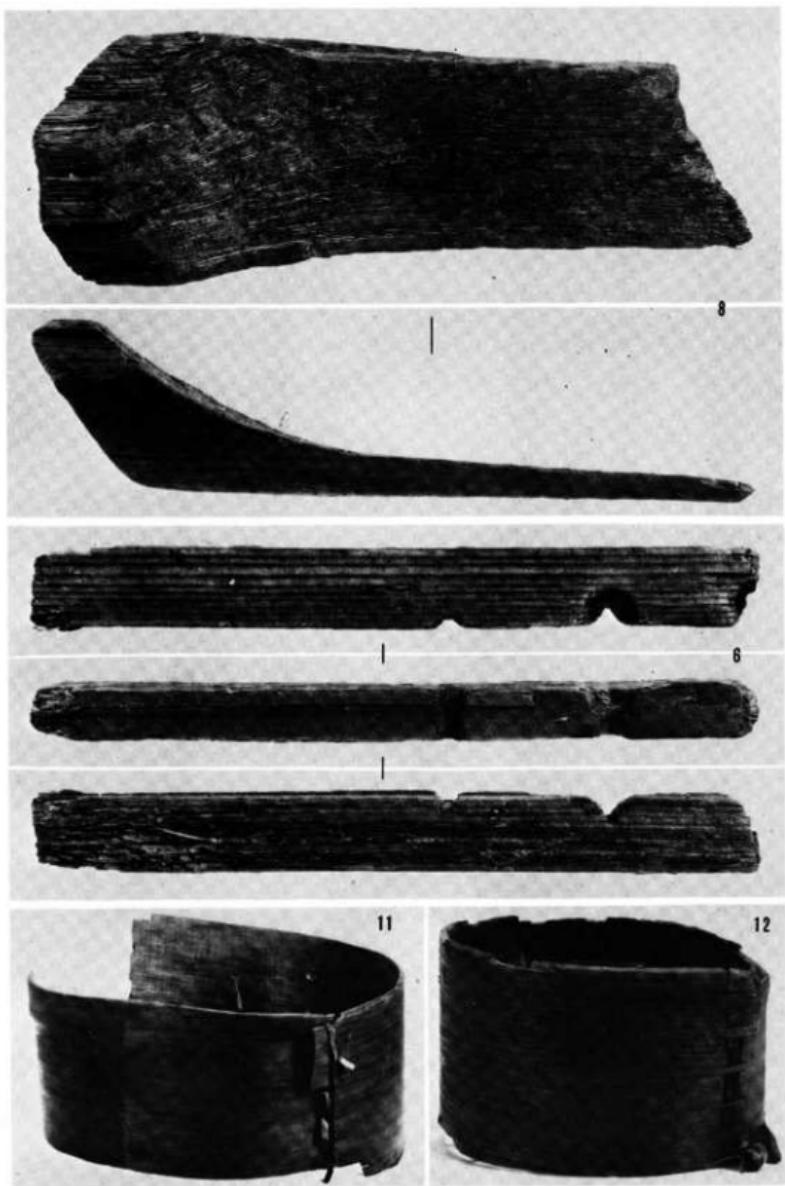


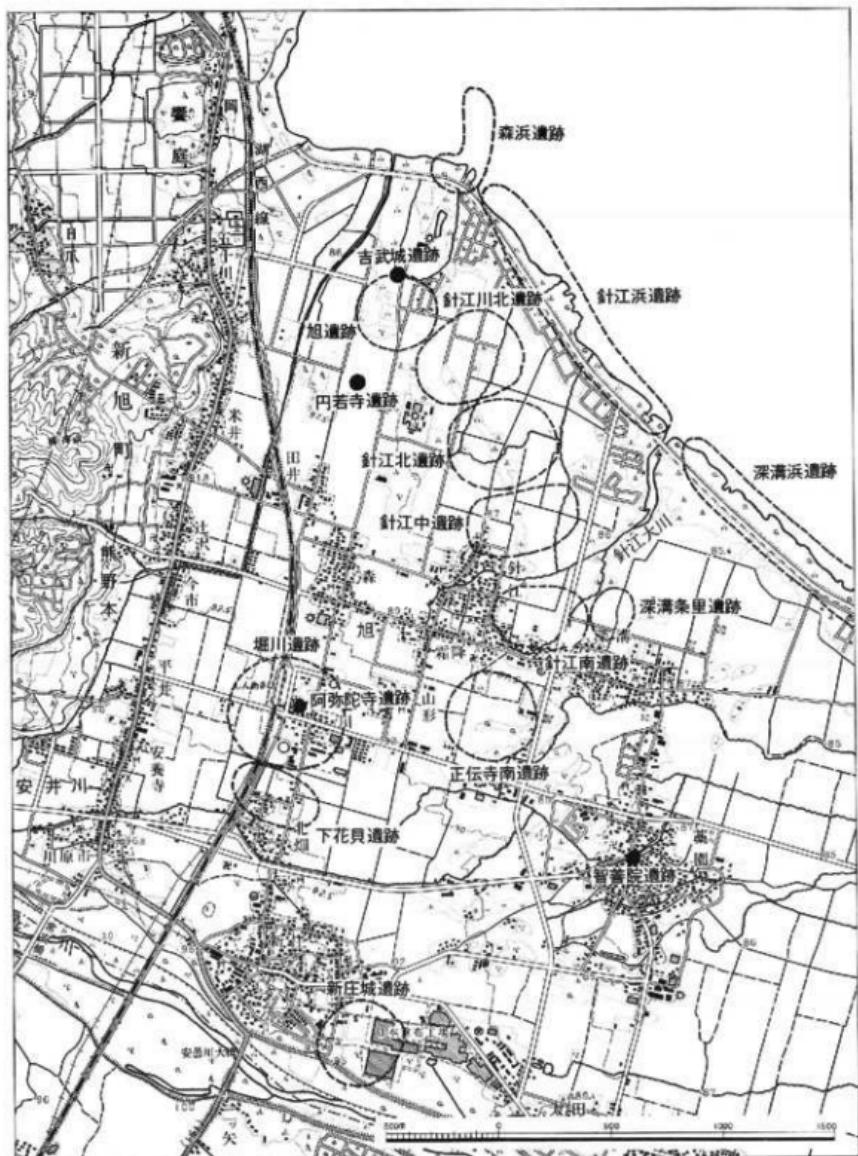
2

圖版二一 錄江中・北遺跡・木製品

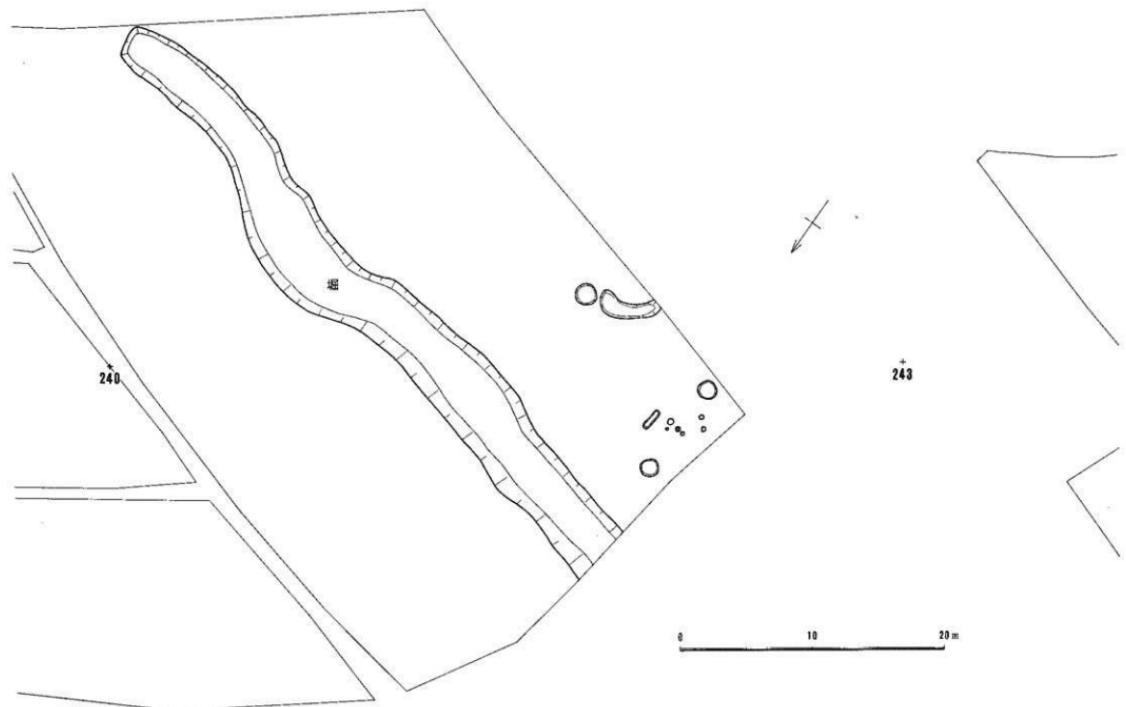


図版二三 針江北遺跡・木製品

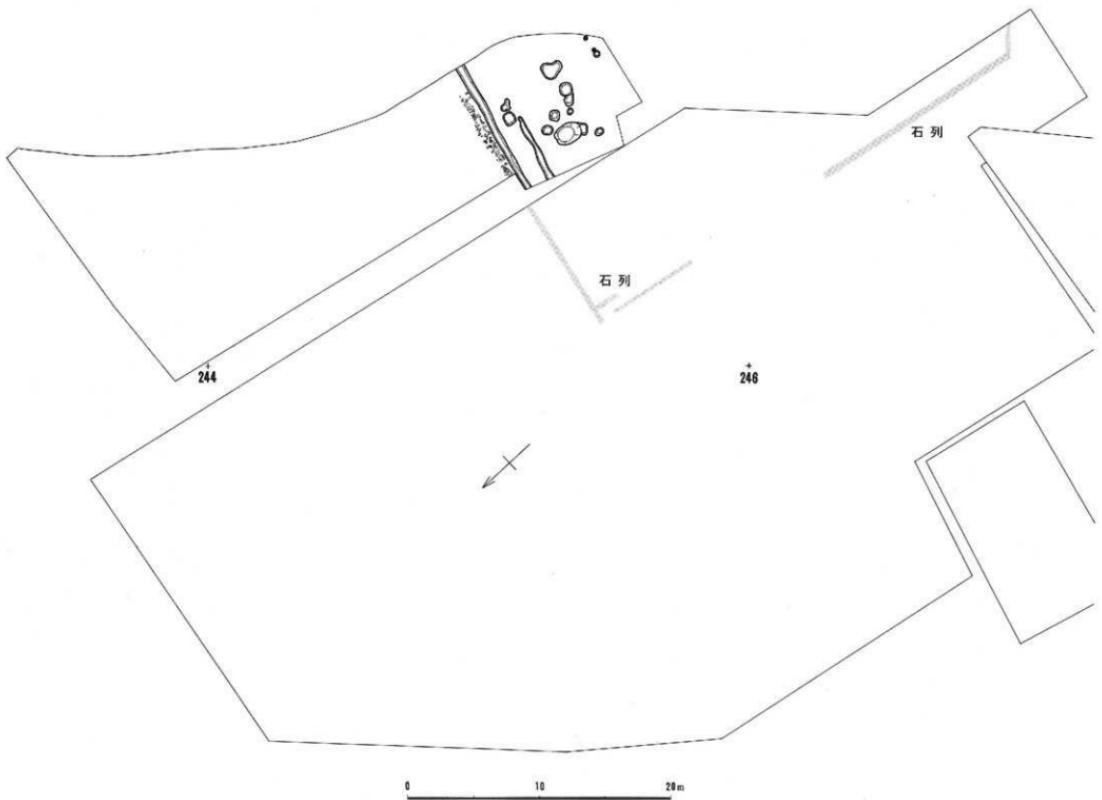




新組町湖岸部における遺跡分布

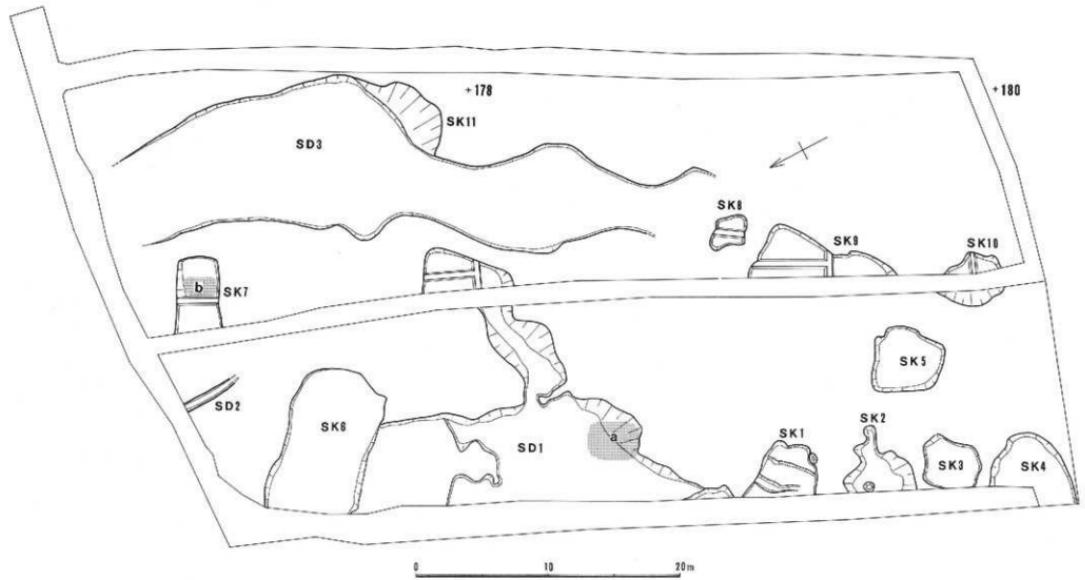


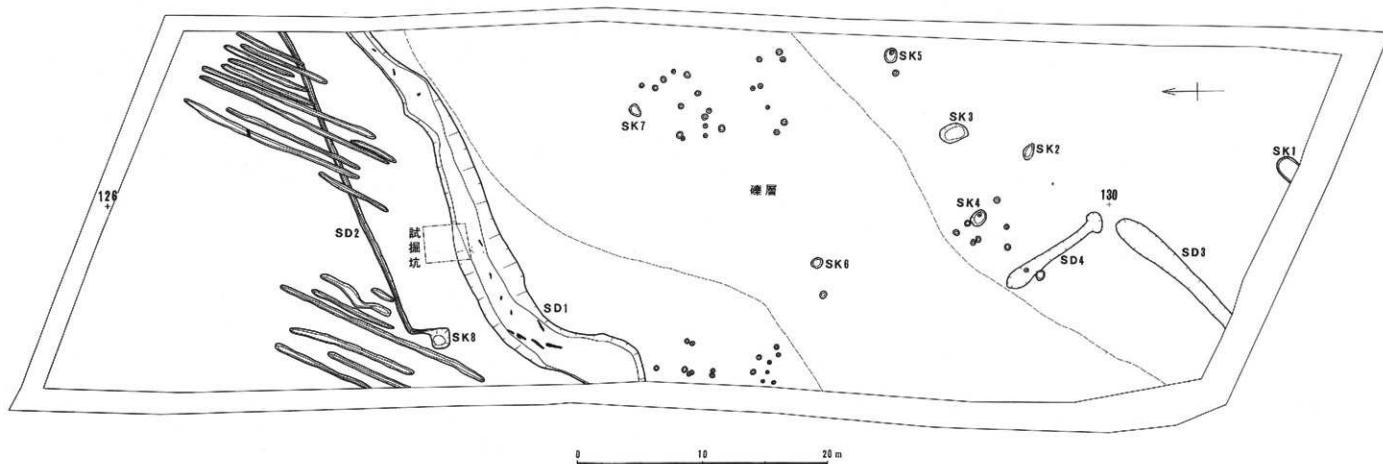
圖版二五 新庄城道路・遺構平面図(2)

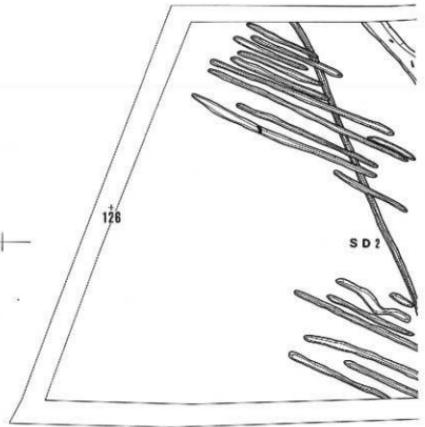
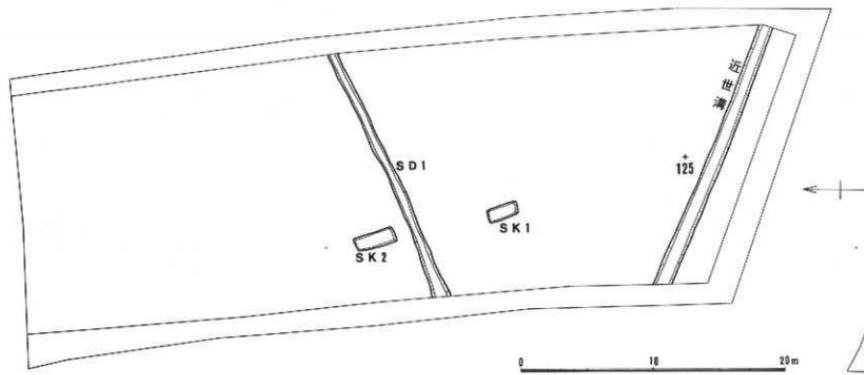




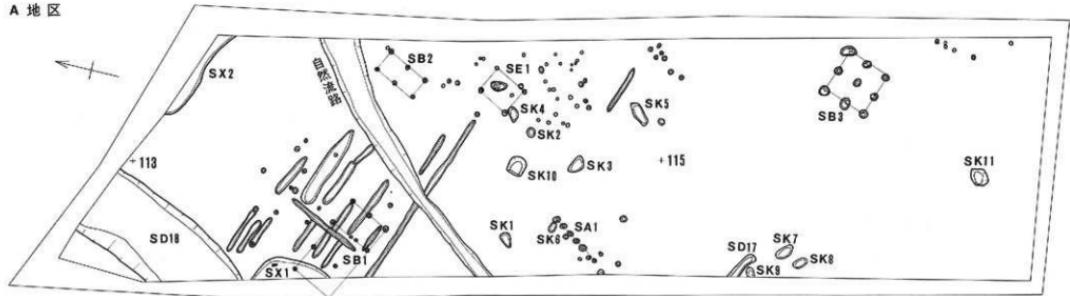
圖版二七 正伝寺南遺跡・造構平面図



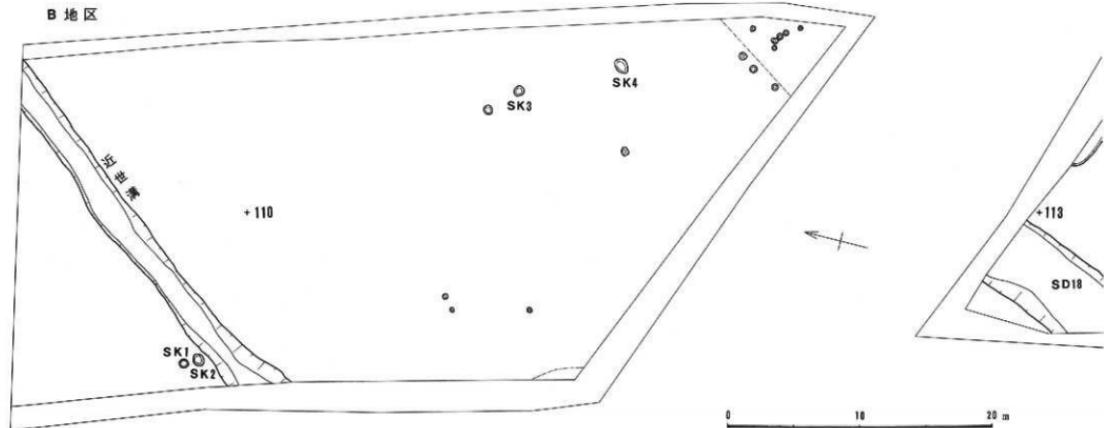




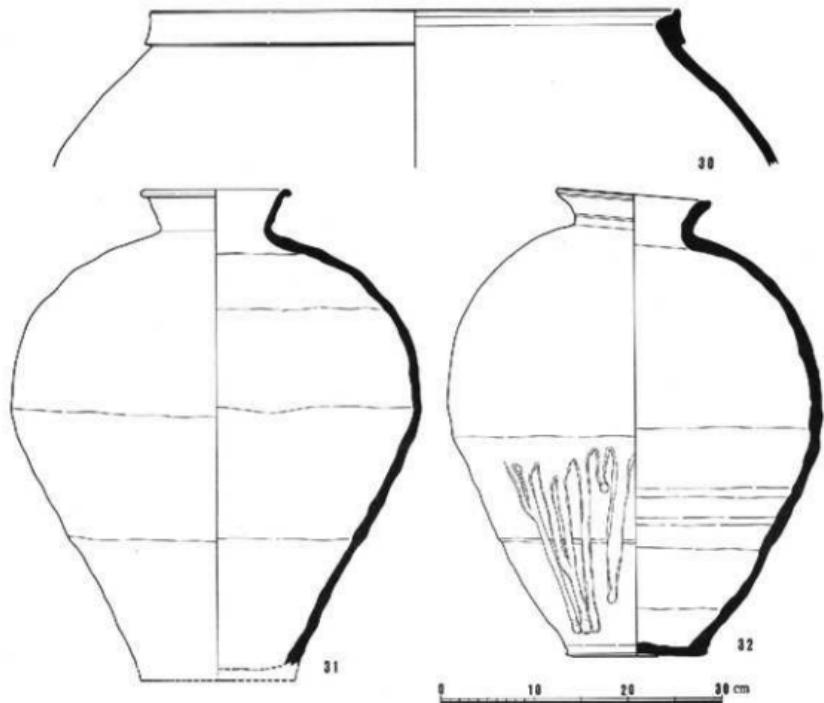
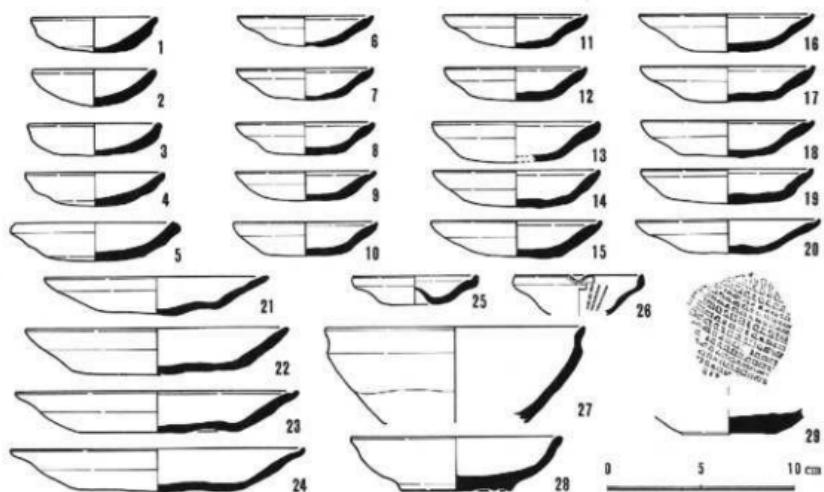
A 地区

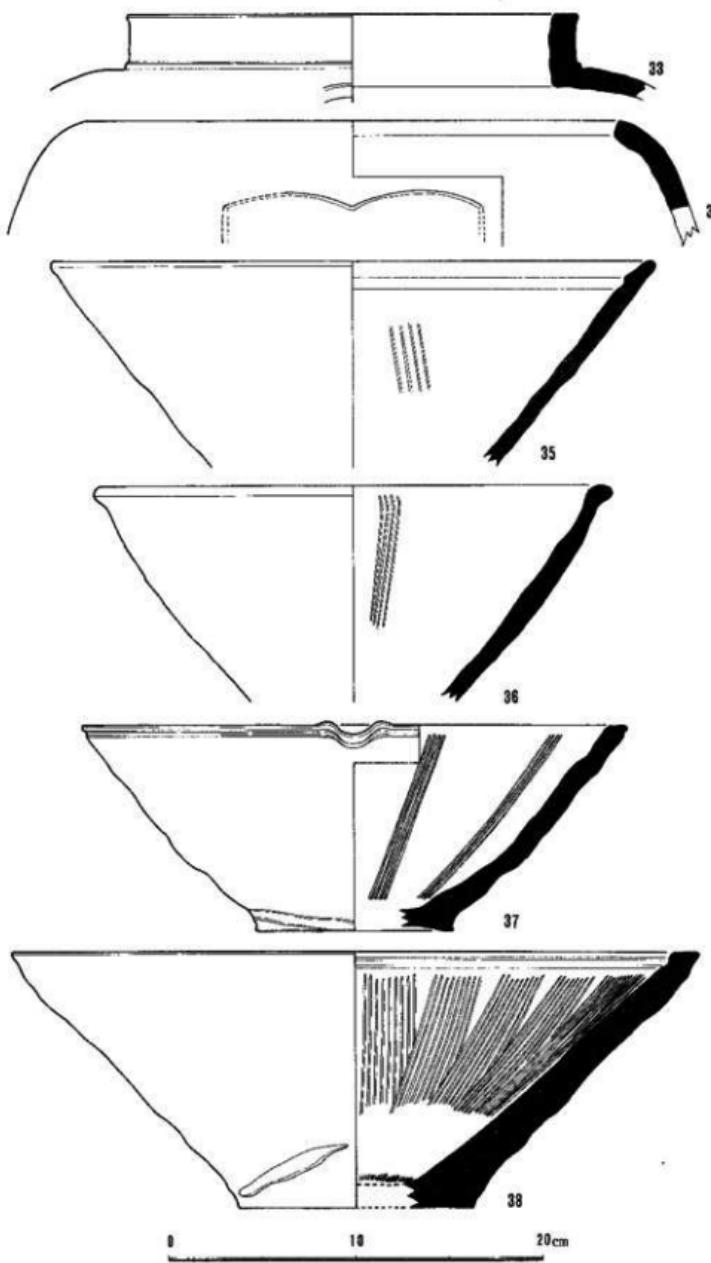


B 地区

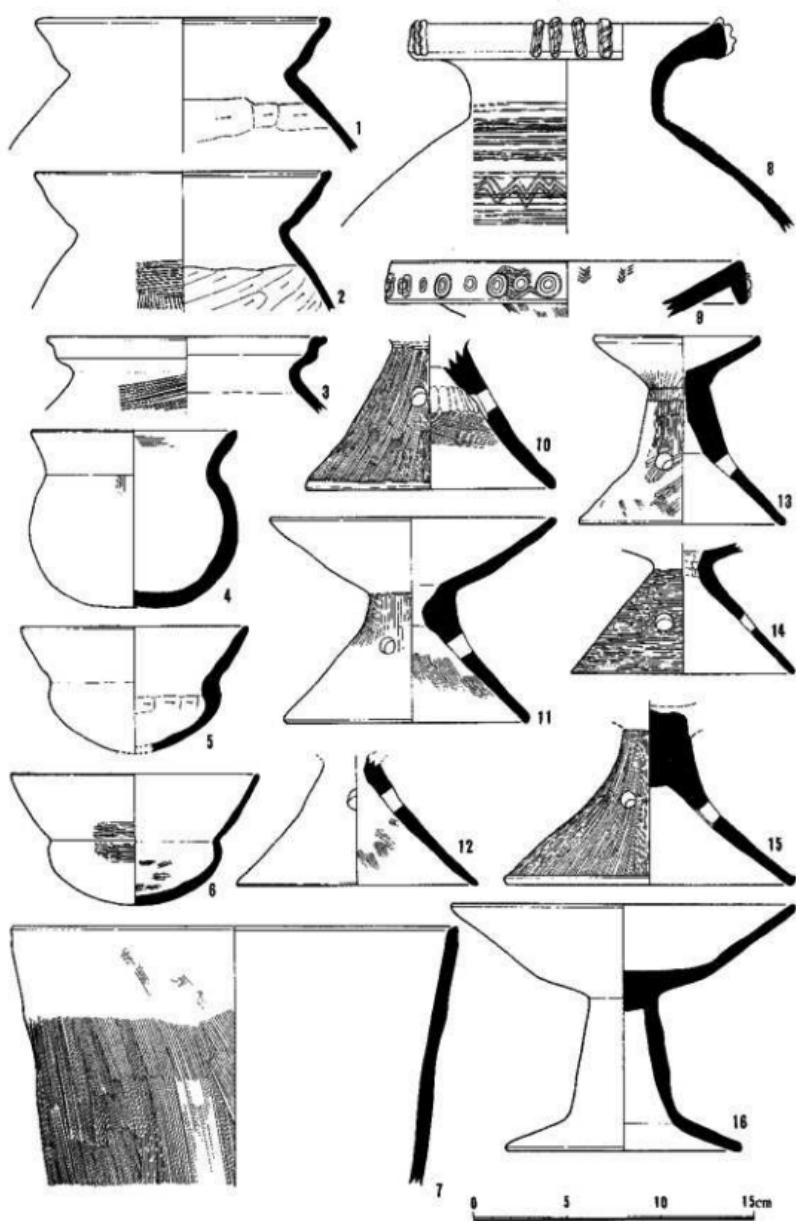


図版三一 新庄城遺跡・土器実測図(1)

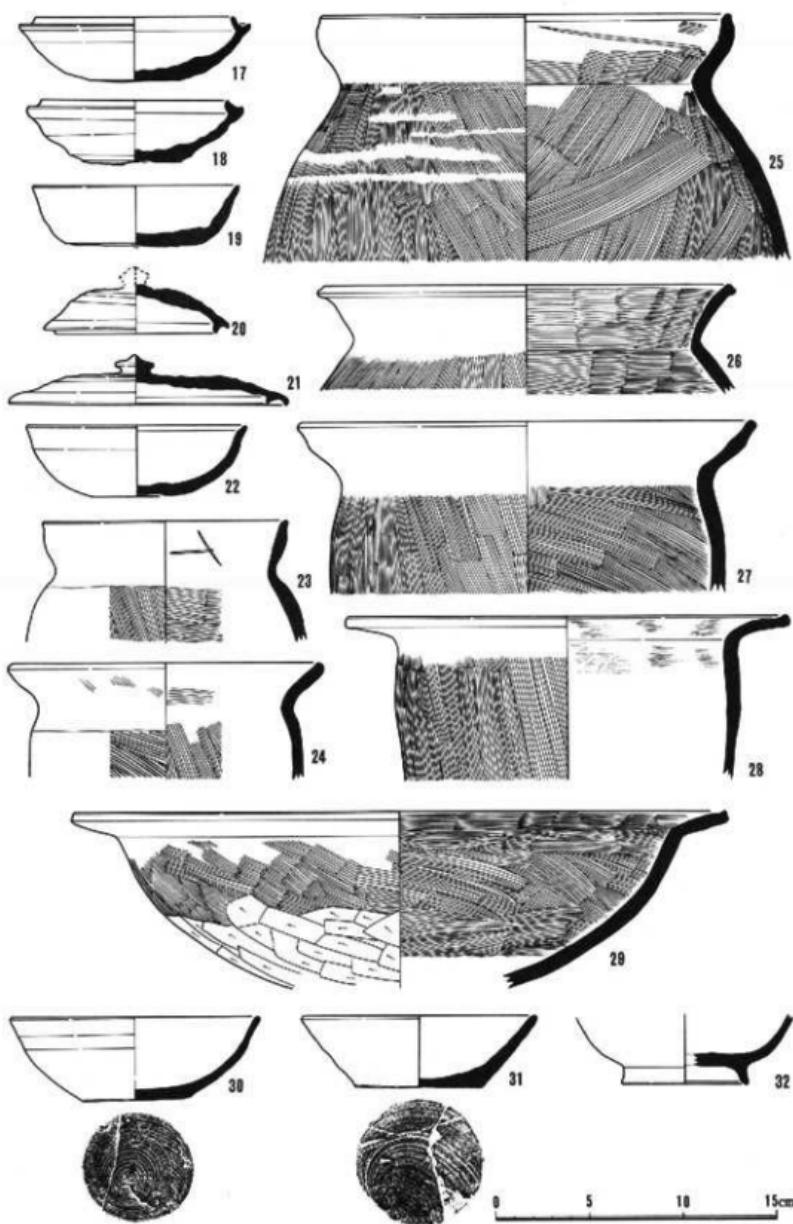




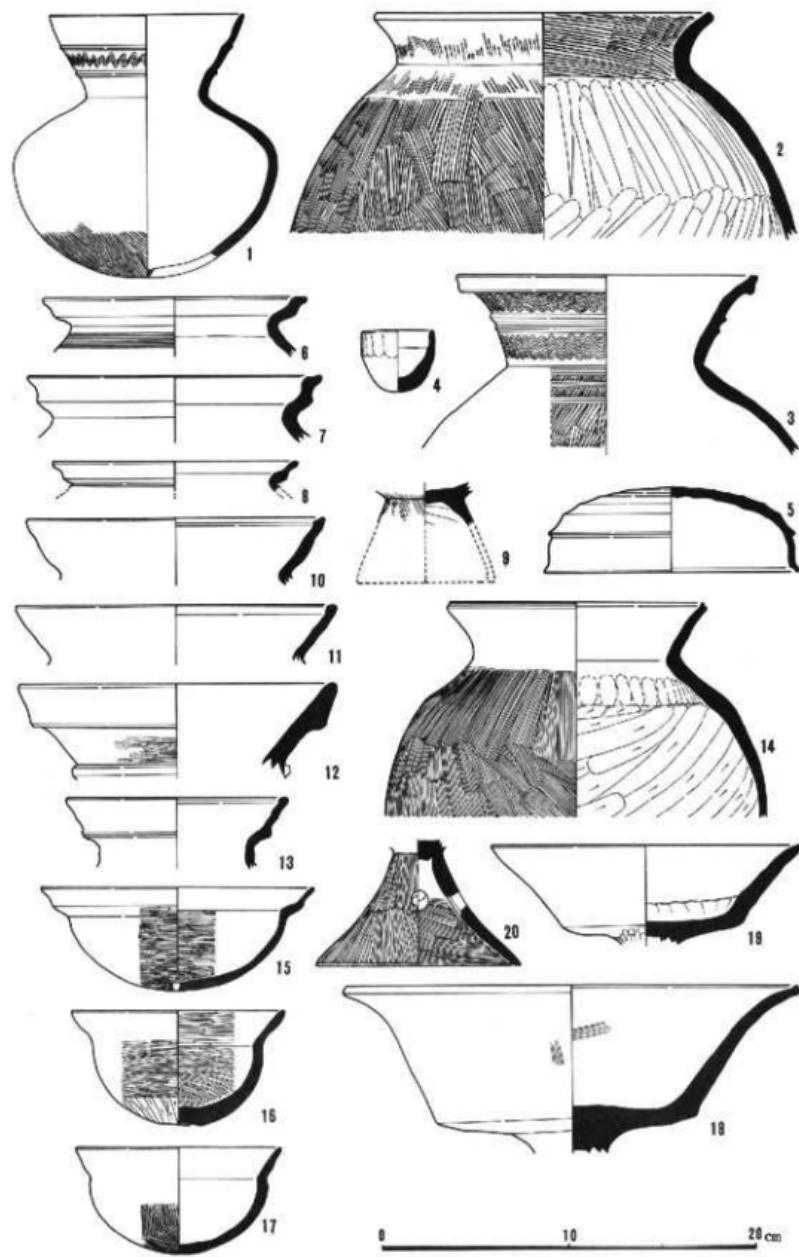
図版三三 正伝寺南遺跡・土器実測図(1)

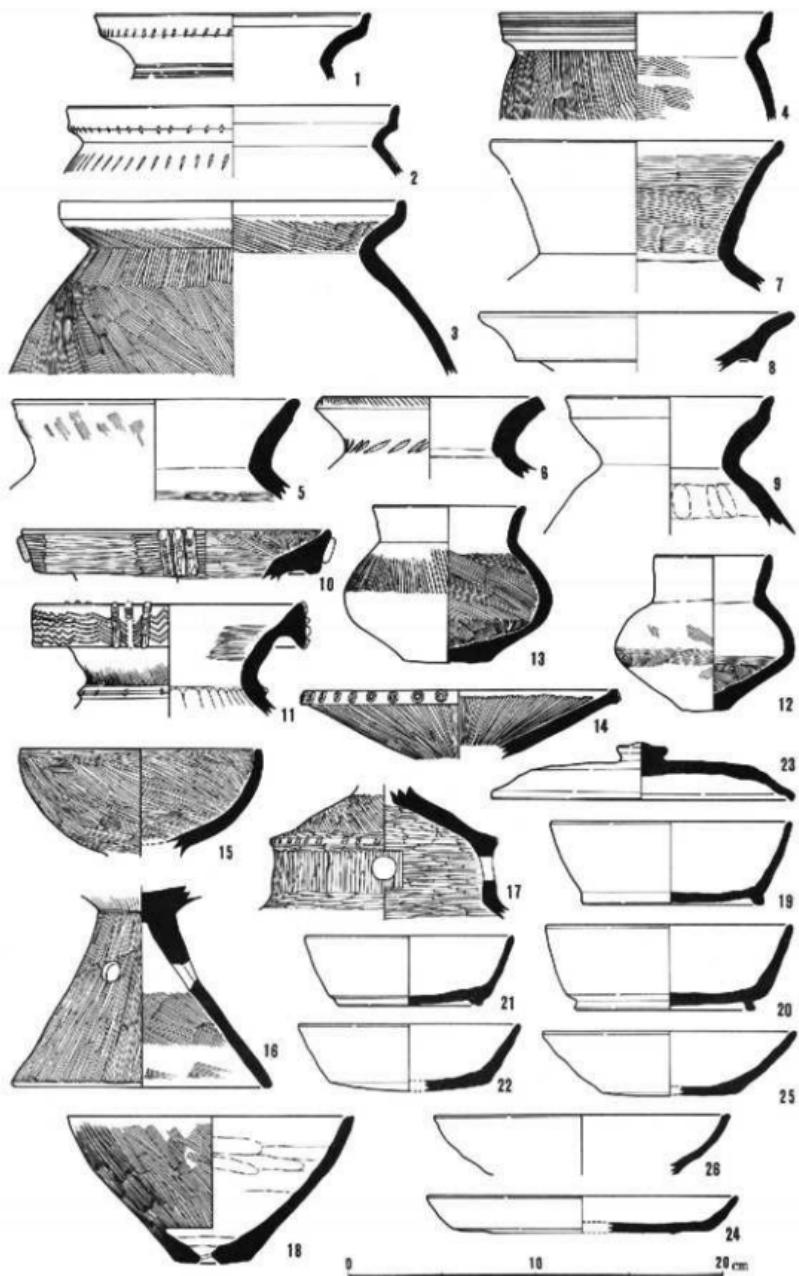


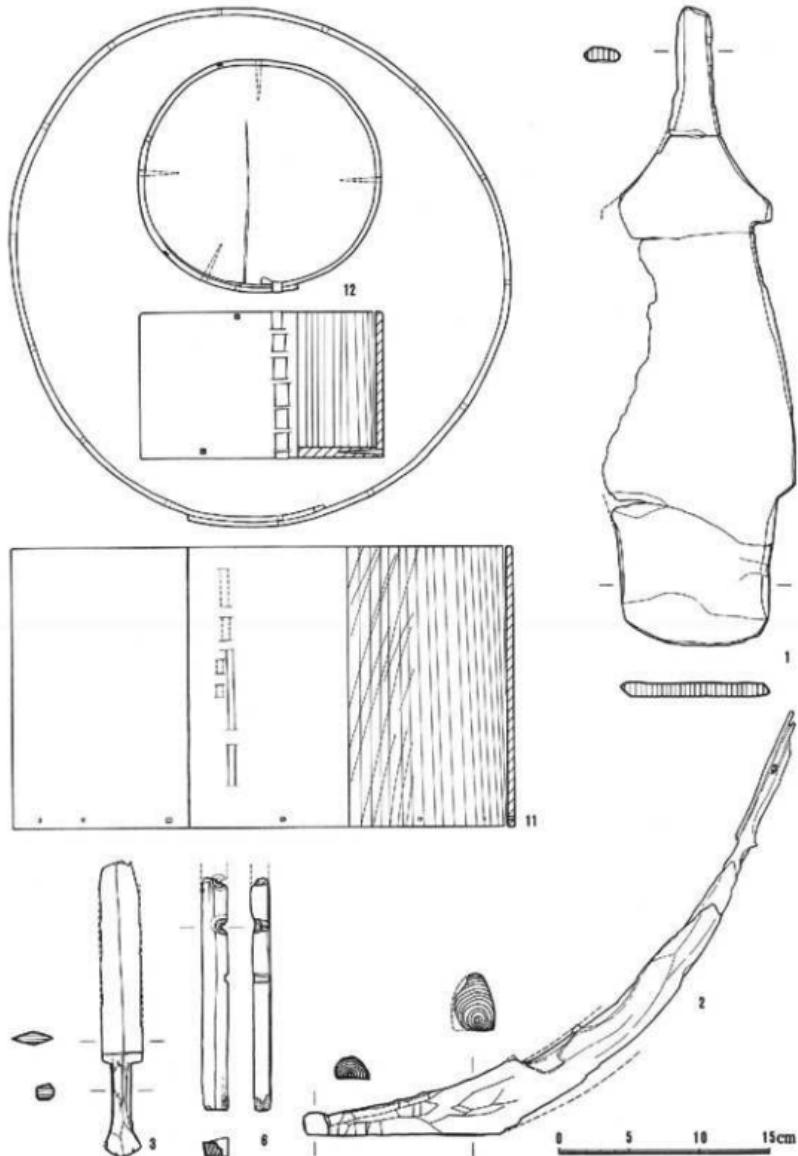
図版三四 正伝寺南遺跡・土器実測図(2)



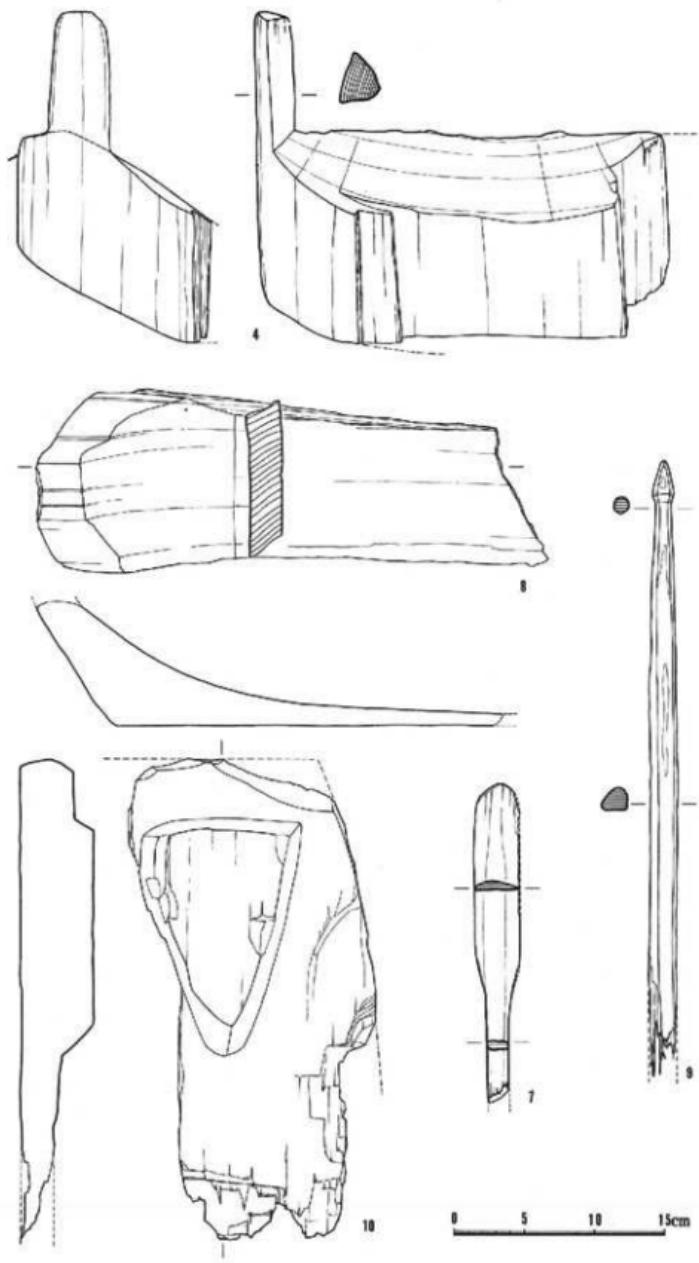
図版三五 鈴江中遺跡・土器実測図







図版三八 針江中・北遺跡・木製品実測図(2)



国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和57年度）3

新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・
針江北遺跡発掘調査概要

昭和58年3月

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財団法人文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社